後三條天皇

皇后宮みこの宮の女御と聞えける時里へまかり出で給ひにければそのつとめてさかぬ菊にさして御消息ありけるに

まださかぬ籬の菊もあるものをいかなる宿にうつろひぬらむ

延久五年三月住吉にまゐらせ給ひてかへさによませ給ひける

住吉の神はあはれとおもふらむなしき舟をさしてきたれば

七月ばかりに若き女房月見にあそびありきける夜藏人公俊新少納言がつぼねに入りにけりと人々い

第二句衆花物語「神もあはれと」入鏡「神もうれしと」に作る、

ひあひつゝわらひけるを九月つごもりがたにうへきこしめして御たゝうがみに書きつけさせたまひける

秋風にあふ言の葉や散りぬらむその夜の月のもりにけるかな

〔以上後拾遺集〕

みこの宮と申しけるとき太宰大貳實政學士にて侍りける甲斐守にて下り侍りけるにはなむけたまはすとて

思ひ出でば同じ空とは月を見よほどは雲居にめぐりあふまで

〔新古今集〕

古事談第一句「わすれずば」に作る、

暮春のこゝろをよませ給ひける

ゆく春のせきにしとまるものならば逢坂山のはなは散らじな

行路霧といふ事をよませ給ひける

秋の野に旅寝せよとや夕霧の行くべきかたをたちへだつらむ

〔以上續古今集〕

御前に菊を多く植ゑさせ給へりけるを辨乳母申し

けるをたまはせざりければ「ほしとのみ見てややみ

なむ雲の上に咲きつらなれる白菊の花」と申して侍

りければ

色々にうつろふ菊を雲のうへのほしとはいかで人のいふらむ

〔玉葉集〕

白河天皇

八月ばかり殿上のをのこどもをめして歌よませさ

せ給ひけるに旅中聞鴈といふ心を

和歌一字抄第二句「道もわすれて」に作る、

さしてゆく道はわすれて鴈がねの聞ゆる方にこゝろをぞやる

萩盛待鹿といふこゝろを

和歌一字抄第二句「同じ秋をや」に作る、

かひもなき心地こそすれさを鹿の立つ聲もせぬ萩のにしきは

毎家有秋といふこゝろを

和歌一字抄第四句「あやしく月の」に作る、

宿ごとにおなじ野邊をやうつすらむ面がはりせぬ女郎花かな

月前落葉といふこゝろを

もみぢ葉の雨とふるなる木の間よりあやなく月の影ぞもりくる

承保三年十月今上みかりのついでに大井川にみゆ
きせさせ給ふによませ給へる

大井川ふるきながれをたづね來て嵐のやまのもみぢをぞ見る

うへのをのこども所の名をさぐりて歌奉り侍りけ
るに逢坂の關の戀をよませ給へる

逢坂の名をもたのまじ戀すればせきのしみづに袖もぬれけり

時代不同歌合第五句「袖はぬれけり」に作る、

うへのをのこども松淵底に老いたりといふこゝろ
をつかうまつりけるに

よろづよの秋をもしらですぎ來たる葉かへぬ谷の岩根松かな

（以上後拾遺集）

柳絲隨風といふこゝろを

風ふけば柳の絲のかたよりになびくにつけて過ぐるはるかな

宇治前太政大臣京極の家の御幸の日よませたまひ
ける

春がすみたちかへるべき空ぞなきはなの匂にこゝろとまりて

應德元年四月三條の内裏にて庭樹結葉といへる事
をよませ給ひける

おしなべてこずゑ青葉になりぬれば松の緑もわかれざりけり

初度本第二句「こずゑみどりに」第四句「松のちとせも」に作る、

待郭公といへる事をよませ給へる

ほとゝぎす松にかゝりてあかすかな藤の花とや人は見るらむ

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて池上翫月といへる
ことをよませ給ひける

初度本第五句「わがものと見む」に作る、

池水に今宵の月をうつしもてこゝろのまゝにわがものと見る

〔以上金葉集〕

所々に花をたづぬといふ事をよませ給ひける

春くれば花のこずゑに誘はれていたらぬ里のなかりつるかな

〔詞花集〕

和歌一字抄第二句「花の匂ひに」に作る、

鳥羽殿におはしましけるころ常見花といへる心を

をのこどもつかうまつりけるついでによませたまうける

咲きしより散るまで見れば木の本に花も日數も積りぬるかな

〔千載集〕

卯花如月といへる心をよませ給ひける

卯の花のむら〳〵咲ける垣根をば雲間の月のかげかとぞ見る

待客聞時鳥といへるこゝろを

時鳥まだうちとけぬしのびねは來ぬ人を待つわれのみぞ聞く

夏の御歌の中に

庭の面は月もらぬまでなりにけりこずゑに夏のかげ繁りつゝ

熊野へ詣でたまひける道に花のさかりなりけるを

御覽じて

咲きにほふ花のけしきを見るからに神の心ぞそらにしらるゝ

〔以上新古今集〕

和歌一字抄第五句「日數つもりて」に作る、

晚風知菊といふことを

ゆふぐれの風のふかずば菊の花匂ふまがきをいかで知らまし

雲葉集第一句「ゆふぐれに」に作る、

林葉漸變といへる心をよませ給ひける

柞原しぐるゝかずのつもればや見るたびごとに色かはるらむ

〔以上續古今集〕

熊野に参らせ給ひける時よませ給ひける

山の端にしぐるゝ雲をさきだてゝ旅の空にもふゆは來にけり

〔新後撰集〕

夫木抄雲葉集第五句「色まさるらむ」に作る、

承保二年四月清涼殿にて久契明月といふ事を講ぜられしついでに

しづかなるけしきぞしるき月影の八百萬代をてらすべければ

〔玉葉集〕

春の御歌の中に

峰つゞきにほふ櫻をわがものと折りてや來つる春の日ぐらし

〔續千載集〕

雲葉集詞書「花の御歌の中に」に作る、

位におましゝける時うへのをのこども暮天郭公といふ事をつかうまつりけるついでに

夕日さすそらにかたらふ郭公けふはこれこそはつねなりけれ

寛治五年十月大井川に御幸ありて落葉滿水といふことをよませ給うける

大井川ゐぜきにとまるもみぢ葉は立ちくる涙に流れぬるかな

〔以上續後拾遺集〕

寛治七年三月十日法勝寺の花御覽じけるついでに常行堂の前にて人々鞠つかうまつりけるに京極前

白河天皇

關白太政大臣鞠を奉るとて「尋ぬと聞くに誘はれぬ」
と奏し侍りける御かへし

山ふかくたづねには來でさくら花なにし心をあくがらすらむ

〔風雅集〕

藤原範永朝臣ひさしくまゐらざりければたまはせける

春といへば花やかをると山ざくら見るべき人の尋ねこぬかな

萬代集第一第二句「春くれば花やかはると」に作る、

熊野に御幸の時よませ給うける

沖つかぜ吹上の千鳥夜やさむきあけがたちかき波に鳴くなり

〔以上新千載集〕

春の御歌の中に

白雲のたえまにかすむ山ざくら色こそ見えねにほふはるかぜ

〔新後拾遺集〕

冬の御歌の中に

跡もなく雪ふりつもる山路をばわれひとりゆく心地こそすれ

〔續詞花集〕

平清盛のいまだをさなかりしほどいたく夜泣する
よし聞しめして忠盛に下されける

夜泣きすとたゞもりたてよ末の世に清くさかゆる事もこそあれ

〔平家物語〕

長門本には母なる女御の夢に見たる歌として第三句「この子をば」に作る、源平盛衰記には熊野社證誠殿の託宣として第一句「夜泣くとも」第三句「みどり子は」に作る、

堀河天皇

堀河院のおほんとき女房たちを花山の花見せにつかはしたりけるにかへりまゐりて御まへにて歌つかうまつりけるに女房にかはりてよませたまうける

よそにては岩こす瀧とみゆるかなみねの櫻やさかりなるらむ

長治二年三月五日内裏にて竹不改色といへる事をよませ給うける

初度本第一句「ちよふれど」に作る、

世々ふれど面がはりせぬ河竹は流れての世のためしなりけり

嘉承二年三月鳥羽殿の行幸に池上花といへる事をよませ給ひける

初度本第三句「櫻ばな」に作る、

池水の底さへにほふはなざくら見るともあかじ千代の春まで

肥後の内侍をとこに忘られて歎きけるを御覽じてよませ給ひける

奏覽本第五句「そぼちぬるかな」に作る、

忘られて歎く袂を見るからにさもあらぬ袖のしをれぬるかな

〔以上金葉集〕

堀河院の御時きさいの宮にて花契遐年といへるころを上のをのこどもつかうまつりけるによませたまうける

千年まで折りて見るべき櫻花こずゑはるかに咲きそめにけり

〔千載集〕

雲間微月といふことを

しきしまや高圓山のくもまよりひかりさしそふゆみはりの月

〔新古今集〕

長治二年三月中殿にて竹不改色といふ題を講ぜられ侍りけるに京極前關白家肥後御製をうけたまはりおよびて「川竹のながれてきたる言の葉は世にたぐひなきふしとこそ聞け」とよみて奏し侍りけるに御かへし

神代よりながれ絶えせぬ河竹にいろます言の葉をぞ添へける

〔續後撰集〕

夏の御歌の中に

玉藻かる池のみぎはの菖蒲草ひくべきほどになりにけるかな

贈皇后宮かくれての春の頃山の霞を御覽じて

あづさゆみ春の山邊のかすむこそ戀しき人のかたみなりけれ

〔以上續古今集〕

續詞花集詞書「あやめをよませ給ひける」に作る、

萬代集第二句「春の山邊し」に作る、

鳥羽天皇

白河の花見の行幸に

尋ねつるわれをや風(花)も待ちつらむけふ(きょう)ぞさかりに匂ましける

〔金葉集〕

五十の御賀過ぎて又の年の春鳥羽殿の櫻のさかりに御前の花を御覽じてよませ給うける

續詞花集第二句「のどかにほへ」第五句「いつか見るべき」後葉集第五句「いつかまつべき」に作る、

心あらばにほひをそへよ櫻ばなのちの春をばたれか見るべき

わづらはせ給うける時鳥羽殿にて時鳥の鳴きける

をきかせ給うてよませたまうける

つねよりもむつまじきかな時鳥しでの山路のともとおもへば

〔以上千載集〕

人につかはしける

いかばかり嬉しからましもろともにこひらるゝ身も苦しかりせば

鳥羽殿にて花のちりがたなるを御覽じて後三條内

大臣にたまはせける

をしめども常ならぬ世の花なれば今はこの身を西にもとめむ

〔以上新古今集〕

月詣集第四句「花咲かぬには」に作る、

春の御歌の中に

降る雨のあまねくうるふ春なれば花咲かぬ目はあらじとぞ思ふ

御なで物の鏡をたまはりければ覺鑁上人「ますかゞ

みうつしおこする姿をばまことに三世の佛とぞ見

る」とよみて奏し侍りけるに御返し

おしなべて誰も佛になりぬとはかゞみの影に今日こそは見れ

〔以上續千載集〕

水上月といへる事をよませ給うける

さゞなみの志賀の浦わにきり晴れて月澄みわたる唐崎のはま

〔續後拾遺集〕

崇徳天皇

春

あさみどりやへの霞や二とせのゆきあふ空のへだてなるらむ

子の日すと春の野ごとに尋ぬれば松にひかるゝ心地こそすれ

賤女がかたみしるべく日をつめどまだうら若菜手にし溜らず

春の夜は吹きまふ風のうつりがを木ごとに梅と思ひけるかな

大かたの色をばいはじ梅の花香をもあだには散らさゞらなむ

あらしふく岸の柳のいなむしろをりしく波にまかせてぞ見る

鶯の鳴くべきほどになりゆけばさもあらぬ鳥も耳にこそたて

春ごとにたかきにうつるうぐひすや位の山のありすなるらむ

玄玉集第一句「子の日する」に作る、
玄玉集第一第二句「賤女はかたみしなへて」第五句「手にもたまらす」に作る、
千載集第三句「うつりがに」に作る、
後葉集第三句「なりぬれば」に作る、
夫木抄第五句「あかずなるらむ」に作る、

山里は谷の古巣のちかければ出づさ入るさにうぐひすぞ鳴く

おしなべて花のにほひしひとしくば宿の外をば尋ねざらまし

山たかみいはねの櫻ちるときは天のはごろもなづるとぞ見る

ことならばさてこそ散らめ櫻花をしまぬ人もあらじと思へば

ことわりやあらしの山に咲く花は心のどかにほはざるらむ

田子の浦いはねにかゝる藤波はみちくる汐のこゑをかるらむ

老いぬればわか紫にかざゝれてふぢにも松はかゝりけるかな

くらま山木のしたかげの岩つゝじたゞこれのみや光なるらむ

山吹の花のゆかりにあやなくも井出の里びとむつまじきかな

春すぎば岸のやまぶきのこらじをたのむかげとて蛙なくなり

花は根に鳥はふるすにかへるなり春のとまりをしる人ぞなき

第一句雲葉集夫木抄玄玉集「田子の浦の」第四句雲葉集「みちくる汐に」第五句雲葉集夫木抄玄玉集「聲をからなむ」に作る、
玄玉集第一句「老いぬれど」
今撰集玄玉集第五句「かゝるなりけり」に作る、
新後拾遺集夫木抄第一句「くらぶ山」に作る、
雲葉集第一第二句「春くれば峯のやまぶき」に作る、

千載集第二句「花まつほどは」に作る、

玄玉集下句「けふはひきます物なかりけり」に作る、雲葉集第一句「五月闇」新拾遺集雲葉集第四句「鹿やはかなく」に作る、夫木抄第二句「よひらの八重」に第五句「影にぞありける」に作る、

朝夕に花まつころはおもひねの夢のうちにぞ咲きはじめける

夏

かさねきし袖のひとへにかはるにも定なき世ぞ思ひしらるゝ

みあれには誰かはかけぬいかばかり廣き惠のあふひなるらむ

ほとゝぎす鳴きつる杜の一枝はあかぬ名殘のかたみなりけり

こゝろざしふかきあさきを時鳥しるしあらせて聲をきかせよ

かくれぬにいつかと待ちし菖蒲草けふは引きさす物にぞありける

五月雨に花たちばなのかをる夜は月すむ秋もさもあらばあれ

五月山弓末ふりたてともす火に鹿やあやなくめをあはすらむ

早瀬川みをさかのぼる鵜飼船まづこのよにもいかゞくるしき

あぢさゐのよひらの山に見えつるは葉越の月の影にやあるらむ

玄玉集第五句「風もつぐなる」に作る、新勅撰集玄玉集第二句「やそせの波も」に作る、千載集下句「曉露のかくすなりけり」に作る、夫木抄第三句「にしきぞも」に作る、玄玉集第三句「たえねども」第五句「露はこぼるゝ」に作る、第五句新後拾遺集「けさの秋ぎり」今撰集「けさの明霧」に作る、

もろ人のみそぎのかずを河の瀨にながるゝ麻の程にてぞしる

秋

いつしかと荻の葉むけのかたよりにそゞや秋とぞ風も聞ゆる

天の川やすせの波もむせぶらむ年まちわたるかさゝぎのはし

織女に花ぞめごろもぬぎかせばあかつき霧のかへすなりけり

道もせにたが折りしけるにしきめもえぞしらすげのまのゝ萩原

あらはれて蟲のみ音にはたつれども女郎花にぞ露はこぼるれ

秋たちて野ごとに匂ふ藤ばかまなかふむ鹿やあるじなるらむ

なさけなき狩子の耳にさを鹿の今宵のこゑをいかできかせむ

鴈がねのかきつらねたる玉章をたえ〴〵に消つけさの朝ぎり

秋くれば思ひなしかも夕月夜のこりおほかるけしきなるかな

をしみかね入りぬる夜半の月なれど猶面影はとゞめおきけり
月清みゆるぎの杜にゐる鷺のたゝずばよそにいかでわかまし
玉よする浦わのかぜにそら晴れてひかりをかはす秋の夜の月
雲の波あまの川瀬にたゝねどもなにあらはれてすめる月かな
ひたすらに厭ひも果てじかばかりの月をたもてる此世なりけり
秋なれど有明の月は夏の夜のもちよりも見るほどなかりけり
星とのみまがへる菊のかをるかはそらだき物の心地こそすれ
初春の梅をだにこそもとめしかおもへば今はひとつこのはな
入日さすとよはた雲にわきかねつたかまの山の峯のもみぢ葉
高瀬舟かぢふりたてよ大井川きしのもみぢをいかゞすぐべき
もみぢ葉の散りゆくかたを尋ぬれば秋も嵐のこゑのみぞする

夫木抄第三句「かをりかは」に作る、
夫木抄第三句「をしみしか」に作る、

冬

ひまもなく散るもみぢ葉に埋れて庭のけしきも冬ごもりけり
こがらしに紅葉ちりぬる山めぐり何を時雨の染めむとすらむ
つらゝゐてみがける影の見ゆるかなまことに今や玉川のみづ
このごろのをしの浮寝ぞあはれなる上羽の霜よ下のこほりよ
夜をさむみ心づからや鳴く千鳥おのが羽風にむすぶこほりを
みかりする交野のみのにふる霰あなかままだき鳥もこそたて
夜をこめて谷のとぼそに風さむみかねてぞしるき峯のはつ雪
あかず見る竹のうらばの白雪に尾羽うちふるなすだくむら鳥
晴れぬれど枝もとをゝにしぐれしを木の下蔭はなほ雪ぞふる
春きぬと埴生の小屋もそよぐなり齢もくるゝかへりみはせで

千載集續詞花集第四句「上毛の霜よ」に作る、
玄玉集第三句「しづりして」に作る、

戀

武藏あぶみふみだにも見ぬものゆゑに何に心をかけ始めけむ

愚にぞ言の葉ならばなりぬべきいはでや君にそでを見せまし

床の上にたえず涙はみなぎれど阿武隈河とならばこそあらめ

先の世の契ありけむとばかりも身をかへてこそ人に知られめ

くれなゐに涙の色はふかけれどあさましきまで人のつれなき

あはれてふなげの情もかゝりなばそをだに袖のかわくまにせむ

命にはかへてあひ見むと思へどもなれて別れば惜からじやは

いかで〳〵歎をつみしむくいとてあひ見て後に人をわびしむ

はしたかのそらしもはてず引きすゑて假初にだにあひ見てしがな

我妹子が思ひさぐるに從はで戀はかみなきものにぞありける

續千載集第二句「なげの情の」に作る、

今撰集第三句「むくいにて」第五句「人を忘れむ」に作る、

根はふかく思ひそめてき奥山の岩もこすげのすげはなけれど

君をだにも人傳ならでおとしめば我身のとがも嬉しからまし

戀ひ〳〵て賴むるけふの吳はどりあやにくに待つ程ぞ久しき

わたつみのおもひしふかき汐あひはけさ立ち歸る涙なりけり

から衣かさねし夜半の手枕につきけるしわをかたみにぞ見る

ゆきなやみ岩にせかるゝ谷川のわれても末にあはむとぞ思ふ

ひれふりし松浦の山の少女子もいとわればかり思ひけむかも

わが戀は斧の柄くちし人なれやあはで七世もすぎぬべきかな

戀死なば鳥ともなりて君がすむ宿のこずゑにねぐらさだめむ

歎くまに鏡のかげもおとろへぬ契りしことのかはるのみかは

後葉集第一句「戀しくて」に作る、

續詞花集下句「つけくるしわを形見とぞ見る」に作る、詞花集第一句「瀨をはやみ」第三句「瀧川の」に作る、夫木抄第三句「少女らも」第五句「思ひけむやも」に作る、

神祇

崇德天皇

夫木抄第五句「明けはじめけむ」に作る、千載集第五句「なのるなりけり」に作る、

闇のうちにぬきてをかけし神遊あか星よりや明けそめにけむ
道のべのちりにひかりをやはらげて神も佛のなのりなりけり

慶賀

吹く風も木々の枝をばならさねど山はひさしき聲ぞきこゆる
龜あそぶ入江の松にゐるたづは三千世重ぬる物にぞありける

釋敎

方便品　若有聞法者無一不成佛
一たびも聞きし御法をたねとして佛の身とぞたれもなりぬる

續古今集第三句「たもつまで」に作る、

安樂行品　於無量劫中乃至名字
名をだにもきかぬ御法をたもつとていかで契を結び置きけむ

壽量品　常在靈鷲山
世の中になほ有明のつきせずと說けばこゝろの闇ぞ晴れぬる

普門品　弘誓深如海
ちかひをば千尋の海にたとふなり露もたのまぬ數にいれなむ

千載集下句「露もたのまば數にいりなむ」に作る、

心經　色卽是空空卽是色
おしなべてむなしと說ける法なくば色に心やそみはてなまし

無常

續古今集第二句「雨ふる川の」に作る、

かきくらし雨ふる庭のうたかたのうたて程なき世とは知らずや
はかなさは外にもいはじ百歌のその人かずは足らずなりにき

先年況列百首人數未終六儀詞藻之輩或依暮齡類朝露
或雖紅顏歸黃壤浮生驗眼慨然墮淚故詠之

離別

沖つ波たちわかるともおとに聞く長居の浦にふなとゞめすな

夫木抄第二句「たちわたるとも」に作る、

羇旅

都いでゝいくかになりぬあづまぢの野原篠原つゆもしみゝに

岩がねのこりしく山を越えくればわが黒駒は黄になりにけり

夫木抄第四句「わが黒駒も」に作る、後葉集下句「心とまると妹しらめや」に作る、千載集第四句「月の旅寝の」に作る、

蜑のすむ濱の藻屑をとりしきてこゝにとまると妹しらめやは

かりごろも袖のなみだにやどる夜は月も旅寝の心地こそすれ

松が根の枕もなにかあだならむたまの床とてつねのとこかは

物名

にはやなぎ

罪しれる人やすむらむ河瀬にはやなきり捨てゝ網のめもみず

しもつけのはな

挿櫛もつげの歯なくてわぎもこが夕けのトをとひぞわづらふ

短歌

しきしまや　やまとの歌の　つたはりを　きけば遙かに

ひさかたの　あまつ神代に　はじまりて　三十文字餘り

ひともじは　出雲のみやの　やくもより　起りけるとぞ

しるすなる　それより後は　もゝくさの　言の葉しげく

ちり〳〵に　風につけつゝ　きこゆれど　近きためしに

ほりかはの　流れをくみて　さゞなみの　寄り來る人に

あつらへて　つたなき事は　はまちどり　跡をすゑまで

とゞめじと　思ひながらも　津のくにの　難波のうらの

なにとなく　舟のさすがに　このことを　忍びならひし

「出雲の宮の」後葉集「出雲の神の」に作る、「起りけるとぞ」千載集「起りけりとぞ」後葉集「起りたるとぞ」に作る、「言の葉しげく」後葉集「言の葉しげき」に作る、「閉ゆれど」後葉集「閉えしと」に作る、「あつらへて」後葉集「あたふべく」に作る、

「世の人ぎゝも」後葉集「世の人ぎゝは」千載集「世の人聞けば」に作る、「心にもあらず」後葉集「心にもあらで」に作る、

なごりにて　世の人ぎゝも　はづかしの　もりもやせむと
おもへども　心にもあらず　かきつらねつる

〔以上久安六年御百首〕

三月盡日うへのをのこどもを御前にめして春の暮れぬる心をよませさせ給ひけるに詠ませ給ひける

惜むとて今宵かきおく言の葉やあやなく春のかたみなるべき

九月十三夜に月照菊花といふ事をよませ給ひける

秋ふかみ花にはきくの關なればした葉に月ももりあかしけり

田家月といふことをよませ給ひける

月清み田中に立てるかりいほの影ばかりこそくもりなりけれ

右兵衛督公行めにおくれて侍りける頃女房につけて申さすること侍りける御返しによませ給ひける

出づる息入るをまつまも難き世を思ひしるらむ袖はいかにぞ

〔以上詞花集〕

近衛殿にわたらせ給うて歸らせ給ひける日遠尋山花といへる心をよませ給うける

尋ねつる花のあたりになりにけり匂ふにしるし春のやまかぜ

暮尋草花といへる心をよませ給うける

秋ふかみたそがれどきの藤袴にほふは名のるこゝちこそすれ

待賢門院かくれさせ給うて後御忌はてゝかたゞ〳〵にかへらせ給ひける日

限ありて人はかたゞ〳〵わかるとも涙をだにもとゞめてしがな

今撰集第三句「わかるめり」續詞花集第五句「とゞめましかば」に作る、

冬のころ後入道法親王高野にこもりて侍りけるに時イ
送り給うける

降る雪は谷のとぼそをうづむとも三世の佛の日やてらすらむ

〔以上千載集〕

雜の御歌の中に

うたゝねは荻ふく風におどろけどながき夢路ぞ覺むる時なき

水渚常不滿といふ心を

おしなべて憂身はさこそ鳴海潟みちひる汐のかはるのみかは

先照高山

朝日さす嶺のつゞきは芽ぐめどもまだ霜ふかし谷のかげぐさ

〔以上新古今集〕

乃至以身而作床座

古はしく人もなくならひきてさゆるしも夜のゆかとなりけむ

止觀の月隱重山擎扇喩之

雪にこそねやの扇はたとへしかこゝろの月のしるべなりけり

〔以上續後撰集〕

今鏡にまだ幼き時の御製として第一句「こゝをこそ」第四句「高くも月の」に作る、

五月雨を

五月雨はたな井にもりしさゝ水の畦こすまでになりにける哉

位におはしましけるとき月を御覽じてよませたまひける

これをこそ雲の上とは思ひつれはるかに月のすみのぼるかな

信解品

かぞふればとほちの里に衰へて五十あまりのとしぞへにける

浄名居士を

汲みてとふ人なかりせばいかにして山井の水の底を知らまし

〔以上續古今集〕

皇太后宮大夫俊成より書きて奉りける御草紙の包紙に「數ならぬ名をのみとこそ思ひしかかゝる跡さへ世にや殘らむ」とかきつけ侍りけるに御返し

水茎のあとばかりしていかなれば書き流すらむ人はみえこぬ

〔續拾遺集〕

女郎花をよませ給うける

見し人も住みあらしてしふる里にひとりつゆけき女郎花かな

蟲をよませ給うける

蟲のごと聲たてぬべき世の中に思ひむせびて過ぐるころかな

海路名所といふ事をよませ給うける

すぎがてに見れどもあかぬたまつ島むべこそ神の惠とめけれ

藥草喩品のこゝろをよませ給うける

さまゝ〳〵に千々の草木の程はあれど一つ雨にぞめぐみそめぬる

勸持品をよませ給うける

おほぞらにわかぬ光を天雲のしばしへだつとおもひけるかな

壽量品のこゝろをよませ給うける

月影のいるさへ人のためなればひかりみねども頼まざらめや

〔以上玉葉集〕

若菜を

春くればゆきげの澤に袖垂れてまだうらわかき若菜をぞ摘む

花の御歌の中に

年ふれどかへらぬ色は春ごとに花に染めてしこゝろなりけり

月の御歌とて

見る人にものゝあはれを知らすれば月やこの世の鏡なるらむ

山家月を

山ざとは月もこゝろやとまるらむ都にすぎて澄みまさるかな

松山へおはしまして後都なる人の許につかはさせ給ひける

おもひやれ都はるかに沖つ波たちへだてたるこゝろぼそさを

續詞花集第二句「かはらぬ物は」に作る、

戀の御歌の中に

なほざりの哀も人のかくばかりあひ見し時も消えなましかば

大藏卿行宗より除目のころ「かくこそは春待つ梅は咲きにけれたとへむかたもなき我身かな」とよみて梅の花につけて奉りける御返事に

八重ざくら開くるほどを頼まなむ老木も春に逢はぬものかは

雜の御歌の中に

わが心たれにか言はむ伊勢の蜑の釣のうけひく人しなければ

〔以上風雅集〕

沙羅林を

こずゑさへ頼むかげなく枯れにけり花の姿の根にしかへれば

〔新拾遺集〕

百首の歌めされけるついでに早蕨を

春の野に雪げの水はながるれどつれなくもゆる下わらびかな

人々に百首の歌めされけるついでに菫菜をよませ給うける

荒れはてゝ淋しき宿の庭なればひとりすみれの花ぞ咲きける

百首の歌めされけるついでに蓮をよませ給うける

雨ふりて玉ゐる露をはちす葉の花のひかりとおもひけるかな

〔以上新續古今集〕

春立つ日

うちなびきけふ立つ春の若水はたが板井にかむすびそむらむ

百首御歌の中に秋

秋の田のほなみも見えぬゆふ霧にあぜづたひして鶉なくなり

月照寒草といふことをよませ給ひける

をみなへし月の光に思ひ出でゝおのがさかりの秋やこひしき

播磨守顯保朝臣みまかりにける時かの朝臣のすみ

ける女のもとにつかはされける

聞くにだに露ところせき古里のあさぢがうへを思ひこそやれ

極化鹿苑

耳近く鹿のそのにて說く法にかつ〳〵かりの世をばいでにき

百首御歌の中に旅

はかなくもこれを旅寐と思ふかないづくも假の宿とこそきけ

〔以上續詞花集〕

皇嘉門院中宮と申しけるとき宮の女房と内のおほんかたの女房と歌合あるべしとていどみあへるあひだ歌よみつゝいひかはしけるに我が方の女房にかはらせたまひて宮のおほんかたにさしおかせ給ひける

久方のあまのかご山いづる日も我が方にこそひかりさすらめ

梅の歌よませ給ひける

吹く風ににほふのみかは梅の花うすくれなゐの色もめづらし

後朝のこゝろを

しのゝめの明けゆく空にかへるとて落つるなみだや道芝の露

〔以上後葉集〕

郭公の歌とてよませ給ひける

枝になく山ほとゝぎすすゑながら花たちばなを手折りてしがな

雑の御歌の中に

郭公夜半になくこそあはれなれ闇にまどふはなれひとりかは

五百弟子品

ゑひのまに情かけゝる白玉を知らではかなくまどふべしやは

提婆品

ふたつなき法のちぎりを千年まで谷の水にやむすびおきけむ

〔以上今撰集〕

萬代集詞書「厭離穢土のこゝろを」第五句「我ひとりかは」に作る、

崇德天皇

崇德院遠き御すまひのころ西行上人より女房どもに「水茎のかき流すべき方ぞなき心のうちは汲みて

西行上人の歌山家集第五句「汲みてしらなむ」に作る、

しるらむ」とよみてつかはしけるに院の御返事

ほど遠みかよふこゝろのゆくばかりなほかきながせ水茎の跡

西行上人ゆかりなるものかしこまりをかうぶりて

けるをめし給へと申しけるに

山家集第二句「つなでひくらむ」第四句山家集夫木抄「しばしが程は」に作る、

最上川つなでひくともいな舟のしばしの程はいかりおろさむ

〔以上拾遺風體集〕

林葉不殘

はゝそ原ちりての後の月なれば冬は木かげもさやかなりけり

卯原夾路

卯花のこなたかなたに咲きぬればいとゞぞほそきさのゝ細道

松陰遇春

とことはにかはしぬ松もさしそふる若枝ぞ春のしるしなりける

隔簾遇戀

心あれやまばらにあめるみす疊夢ばかりこそ聞かまほしけれ

〔以上和歌一字抄〕

崇德院讃州（岐イ）にしてかくれさせ給ひて後御供なりける

る人の邊より傳へられてかゝることなむありしと

て折紙に御宸筆なりける物を贈られしなり

いにしへの　須磨の浦には　藻しほたれ　蜑のなはたき

いさりせし　その言の葉は　聞きしかど　身の類ひには

鳴きわたる　岩うつなみの　かけてだに　思はぬほかの

名をとめて　沈みはてぬる　われぶねの　我にもあらず

としつきも　空しくすぎの　いたぶきの　ならはぬ事に
目も合はで　思ひしとけば　さきの世に　つくれる罪の
たねならで　かゝる歎きに　なることは　あらしの風の
はげしさに　亂れし野邊の　いとすゝき　葉末にかゝる
つゆの身の　置きとめ難く　見えしかば　そのくれ竹の
よをこめて　思ひ立ちにし　あさごろも　袖も我が身も
朽ちぬれど　流石にむかし　わすれねば　くもゐの月を
もてあそび　やまぢの菊を　たれかまた　時につけつゝ
まとゐして　春あきおほく　過ぎにしを　いまは千年を
へだてきて　はつ鴈がねも　ことづてず　馴れにし方は
音も絶えぬ　本のこゝろも　かはらずば　事につけつゝ

きみはなほ　言葉のいづみ　湧くらめど　見しはかくだに
汲みて知る　人もまれにや　なりぬらむ　更にもいはず
かなしきは　ことをたちにし　からくにの　むかしの跡に
ならひてや　深きうきめに　ねもたえぬ　かつ身の程を
いとへども　こゝろの水し　あさければ　胸のはちす葉
いつしかと　ひらけむ事は　かたけれど　たどる〳〵も
くらき世を　出づべき道と　入りぬれば　一たびなども
いふひとを　捨てぬひかりに　さそはれて　玉をつらぬる
木のしたに　花ふりしかむ　時にあはゞ　契りおなじき
身となりて　むなしき色は　染めおきし　言の葉ごとも
ひるがへし　まことの法と　なさむまで　あひ語らはむ

ことをのみ　思ふこゝろを　知るや知らずや
夢の中になれこし契朽ちもせでさめむあしたに逢ふ事もがな

〔以上長秋詠藻〕

反歌玉葉集第一句「夢の世に」第三句「朽ちすして」に作る、

修理權大夫行宗三位せさせむとて德大寺のおとゞ
につけて鳥羽院に見せまゐらせよとて
わが宿のひともとたてる翁草あはれといかゞおもはざるべき

〔今鏡〕

御軍敗れて後御室の寛遍法務が房に入らせ給ひて
思ひきや身を浮雲となしはてゝあらしの風にまかすべしとは
憂きことのまどろむ程は忘られてさむれば夢の心地こそすれ
都をば出でさせ給ふべきよしをば内々聞召しけれ
ども今日明日とはおぼしめさゞるべき所にまさし
く勅使まゐりて事さだまりしかば御心ぼそくおぼ
しめしけるあまりに
みやこには今宵ばかりぞ住の江の岸道おりぬいかでつみ見し
讃岐の松山といふ所におはしましけるに事にふれ
て都こひしくおぼしめして
濱千鳥あとは都にかよへども身はまつやまに音をのみぞなく

〔以上保元物語〕

源平盛衰記第二句「あとは都へ」に作る、

讃岐の松山の津につかせたまひて廳野大夫高遠の
御堂に三年過し給へる時その柱にかきつけさせた
まへる

こゝもまたあらぬ雲居となりにけり空ゆく月の影にまかせて

〔百峰寺縁起〕

蓮如法師讃岐國へ下り御所に參りてあひ奉らむと思ひてありつる人してかくと申入れたりけるが院はかゝるあさましき御かたちを見え給はむ事も憚あればとて召されざりければ「朝倉や木の丸殿に入りながら君にしられで歸るかなしさ」とよみて人につけて見參に入れたりけるに御返し

朝倉やたゞいたづらにかへすにも釣する蜑のねをのみぞなく

〔源平盛衰記〕

「蓮如」十訓抄「蓮妙」に作る

蓮如法師の歌長門本平家物語第一句「身をすてゝ」十訓抄第五句「歸るかなしき」に作る、

近衛天皇

從一位藤原宗子病おもくなりて久しく參り侍らで心細きよしなど奏させて侍りけるに遣しける

うきぐものかゝる程だにあるものをかくれなはてそ有明の月

〔千載集〕

續詞花集第三句「わびしきに」に作る、

忍戀の心を

戀しともいはゞ心のゆくべきにくるしや人目つゝむおもひは

〔新古今集〕

冬の御歌の中に

このねぬる夜の間の風やさえぬらむ筧の水の今朝はこほれる

〔續古今集〕

御こゝち例ならずおはしましける秋よませたまう

蟲の音の弱るのみかは過ぐる秋を惜む我身ぞまづ消えぬべきける

〔玉葉集〕

譬喩品

わがこゝろみつの車にかけつるは思ひの家を憂しとなりけり

〔續千載集〕

弟子品

年ふれどかけてぞ知らぬ衣手に逢ふはかゝなき珠もたりとは

〔續詞花集〕

しをに

萬代集第五句「珠かざるとは」に作る、

露けきは秋のくさばと思ひしをにたることなき袖のうへかな

からはぎ

つらからばきしべの松の浪をいたみ音に現れて泣かむとぞ思ふ

戀の御歌の中に

さゞれ石の巖となるまで迄も君をば戀ひむ逢はずだにあらば

〔以上後葉集〕

春の御歌の中に

けふのみと何思ひけむ花の色をむかしの人は見よといふなり

〔萬代集〕

後白河天皇

みこにおはしましける時鳥羽殿にわたらせ給へり

けける頃池上花といへる心をよませ給うける

池水にみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

月照紅葉といへる心をのこどもつかうまつりけ

る時よませ給うける

もみぢばに月のひかりをさしそへてこれや赤地の錦なるらむ

みこにおはしましける時鳥羽殿に渡らせ給へりけ

る頃八條院内親王と申しける時かの御方にて竹遐

年友といへる心を講ぜられけるによませ給うける

源平盛衰記には大原御幸の折の御製として第二句「岸の青柳」に作る、

後葉集第一句「幾年と」第五句「ためしなるらむ」に作る、

月詣集第一第二句「戀ひわたるけふの秋に」に作る、

幾千世とかぎらざりける吳竹や君がよはひのたぐひなるらむ

逐日增戀といへる心をよませ給うける

戀ひわぶるけふの涙にくらぶればきのふの袖はぬれし數かは

位の御時皇太后宮はじめてまゐり給へりける後の

朝につかはしける

萬世をちぎりそめつるしるしにはかつ〳〵けふの暮ぞ久しき

おなじ御時忍びてはじめてまうのぼりて侍りける

人に朝まつりごとの程まぎれさせ給ふことありて

暮れにけるゆふつかたつかはされける

今朝とはぬつらさに物は思ひ知れ我もさこそは恨みかねしか

うへのをのこども老後戀といへる心をつかうまつ

りけるによませ給うける

おもひきや年のつもるはわすられて戀に命のたえむものとは

〔以上千載集〕

春の御歌の中に

をしめども散りはてぬれば櫻花今はこずゑをながむばかりぞ

鳥羽殿にて旅宿時雨といふ事を

まばらなる柴のいほりにたびねして時雨にぬるゝ小夜衣かな

御なやみ重くならせ給ひて後雪のあしたに

露の命消えなましかばかくばかりふる白雪をながめましやは

最慶法師千載集かきて奉りける包紙に墨をすり筆

を染めつゝ年ふれどかきあらはせる言の葉ぞなき

夫木抄第五句「庭の一聲」に作る、

と書きつけて侍りける御かへし

濱千鳥ふみおく跡のつもりなばかひある浦にあはざらめやは

〔以上新古今集〕

鹿聲何方といふことをよませ給ひける

山里は秋のねざめぞあはれなるそこともしらぬ鹿の鳴く音に

〔續古今集〕

神祇のこゝろを

いはしろの松にちぎりをむすび置きて萬代までの惠をぞまつ

熊野御幸(第)三十二度の時御前にておぼしめしつゞ

けさせ給うける

わするなよ雲は都をへだつともなれてひさしきみくま野の月

〔以上玉葉集〕

夏の御歌の中に

たちばなの花のやど訪ふ郭公かれなでいまもむかし戀ふらむ

〔新千載集〕

平治元年十二月二十六日の夜半ばかり殿上人の體にて仁和寺の方へまぎれいでさせたまひける御道すがら

歎きにはいかなる花の咲くやらむみになりてこそ思ひ知らるれ

〔平治物語〕

二條天皇

やよひのつごもりのころ白川殿に御かたたがへの

行幸ありける夜春殘二日といへる心をうへのをの

こどもつかうまつりけるついでによませ給うける

我もまた春とともにや歸らましあすばかりをばこゝに暮して

月詣集第一句「われもさは」に作る、

うへのをのこども百首の歌奉りける時雪の歌とて

よませ給うける

雪つもる嶺にふゞきやわたるらむ越のみ空にまよふしらくも

うへのをのこども百首の歌奉りける時祝の心をよ

ませ給うける

白雲に羽うちつけて飛ぶたづの遙かに千世をおもほゆるかな

きさいの宮にはじめて參りける女房琴ひくを聞か

せ給うてよみてたまひける

今撰集詞書「聞琴彈戀といふ題をよませ給ひける」第二句今撰集「まよひそめにし」續詞花集「通ひそめにし」に作る、

琴の音に通ひそめぬるこゝろかな松ふく風にあらぬ身なれど

忍びてくれにまうのぼるべきよし侍りける人につかはしける

などやかくさも暮れ難き大空ぞわが待つ事はありと知らずや

人につかはしける

知るらめや落つる涙の露ともにわかれの床にきえて戀ふとは

睦月のついたちごろ忍びたる所に遣しける

たれもよもまだきゝそめじ鶯のきみにのみこそ音しはじむれ

〔以上千載集〕

御禊行幸の御後、前左兵衛督惟方長官にてつかうまつりて次の日雨の降り侍りければ空も心ありける

にやなど奏し侍りけるついでに「御祓せしみゆきの空もこゝろありて天の下こそけふくもりけれ」とつかうまつりけるに御返し

空はれし豐のみそぎに思ひしれなほ日の本のくもりなしとは

〔玉葉集〕

百首の歌よませ給ひけるに櫻を

いつしかと見まくほしきは春霞たつたの山のさくらなりけり

〔續後拾遺集〕

戀の御歌の中に

いかでわれ人を忘れむわすれゆく人とそがくは戀しかりけれ

〔風雅集〕

戀の御歌の中に

雲の上を出でやらざりしあかつきの月の影こそ忘れがたけれ

〔新千載集〕

百首の御歌の中に

冬の夜のさゆるにしるし三吉野のやまの白雪いまぞ降るらし

〔新拾遺集〕

第一句今撰集「冬の夜は」第四句今撰集續詞花集「山の初雪」に作る、

後朝戀をよませ給ひける

ひとりねも習はぬ身にはあらねどもいもが歸れる床の淋しさ

神祇の御歌の中に

天の下人のこゝろや晴れぬらむ出づる朝日のくもりなければ

〔以上新後拾遺集〕

正治二年百首御歌の中に

秋ふかみ杜の下草うらがれてこずゑにすさむ日ぐらしのこゑ

〔夫木抄〕

山花始開といふ事をよませ給うける

いつしかと待ち〳〵て又山櫻けさより散らむことをしぞ思ふ

百首御歌の中に

雲は皆峯のあらしにはらはせてさやけく月のすみのぼるかな

よと共にちゐりたえせぬさび江にもうつれる月は曇らざりけり

獨ゐたるを見てこふといふ事をよませ給ひける

人は皆さよ更けぬとて入りにしをあかつきまでに月見しや誰

清輔殿上申しけるをあるべきやうにて月日へにけ

る程にしんぞくなる者とそうへゆるされぬと聞き
て紫のひともとのくちぬるよしを奏せよとおぼし
くて女房許へ申しつかはしたりける御返事に
紫のおなじくさ葉に置く露のそのひともとをへだてやはせむ

〔以上續詞花集〕

百首の歌よませ給ひける中に花を
ほどもなくなに匂ふらむ櫻ばななか〳〵人のこゝろづくしに

郭公の歌とて
羽かぜには花たちばなをにほはせてやさしくも鳴く郭公かな

曉推留戀
明けぬなり歸れといへどいかゞせむこればかりこそ君に違はめ

〔以上今撰集〕

高倉天皇

瞿麥露滋といふことを
白露のたまもて結へるませのうちに光さへそふとこなつの花

紅葉透霧といふことを
薄霧のたちまふ山のもみぢ葉はさやかならねどそれと見えけり

のこりのうへのをのこども曉望山雪といへる心をつかうま
つりけるに
音羽山さやかにみするしらゆきを明けぬと告ぐる鳥の聲かな

戀の御歌の中に

けさよりはいとゞ思ひをたきましてなげきこりつむ逢坂の山

〔以上新古今集〕

深夜千鳥をよませ給うける

波の音にふしさだまらぬ浦人のともなひあかす小夜千鳥なか

〔續後拾遺集〕

歴代御製集卷二終

歴代御製集卷三

後鳥羽天皇　上

正治二年七月北面御歌合

松契多年

長き世の友とやちぎる春日野のまだ二葉なるまつのみどりを

水邊月

いはしみづすむ月影の光にぞむかしのそでを見るこゝちする

初見紅葉

見わたせばけふしら露のうはぞめに色づきにけり衣手のもり

續古今集第二第三句「すみける月の光にも」に作る、

同七月十八日歌合

關路月

きよみがた關もる波に夢さめてみやこにすみし月をみるかな

故郷蟲

あれにける高津の宮をきてみれば籬のむしやあるじなるらむ

門田稻花

山ざとのかどだのいなばかぜこえて二色ならぬ涙ぞたちける

同八月御百首

春二十首

いつしかとかすめる空のけしきにてゆくすゑ遠しけさの初春

春きてもなほ大空はかぜさえてふるす戀しきうぐひすのこゑ

霜がれし野邊のけしきも春くれればみどりにうつる雪の下ぐさ

梅がえはまだ春たゝず雪の中に匂ひばかりはかぜにしられて

昔よりいひしはこれかゆふがすみかすめる空のおぼろなる月

ながむれば雲路につゞく霞かなゆきげの空のはるのあけぼの

薄くこきそのゝ胡蝶はたはぶれて霞める空に飛びまがふかな

何となく物あはれなるきさらぎの雨そぼふれるゆふぐれの空

秋のみとたれおもひけむ春がすみ霞める空のくれかゝるほど

花か雪かとへどしら玉いはねふみ夕ゐる雲にかへるやまびと

さくらさく春の山邊にこのごろはそこともみえぬ花の下ぶし

春雨に軒のかげろふみえわかずくれゆく空のたどゝしさに

吹きまよふ吉野の奥のはる風はにほひをそふる雪げなりけり

春のあした花ちるさとをきてみれば風に涙よる庭のあわゆき

かぜは吹けどしづかに匂へをとめ子が袖ふる山に花のちる比
櫻ばなちりのまがひに日はくれていづちもとほし志賀の山越
芳野山木ずゑさびしくなりぬとも猶やすらはむ花のあたりは
こやのいけのあやめにまじる杜若花ゆゑ人にしられぬるかな
すぎがてにゐでのわたりを見渡せばいはぬ色なる花の夕ばえ
あけぼのを何あはれともおもひけむ春暮るゝ日のにしの山陰

萬代集第五句「花のあたりに」に作る、

夏十五首

夏くれば心さへにやかはるらむはなにうらみし風もまたれて
くるかたへ春のかへらば此比やあづまに花のさかりなるらむ
夜もすがらやどの木ずゑに郭公まだしきほどの聲を待つかな
卯の花の蔭なかりせばほとゝぎす空にやけふの初音聞かまし

續古今集第五句「初音なかまし」に作る、

つくばねの夏の木蔭にやすらへば匂ひし花のなごりともなし
夏の夜の夢路にきなくほとゝぎすさめても聲はなほ殘りつゝ
時鳥そらかきくもる夏の雨におもはせがほの夜半のひとこゑ
夏の月秋にかはらずすめる夜はかげさへ涼しせみの羽ごろも
軒近くしばしかたらへほとゝぎす雲よく夜ゐのむらさめの空
さみだれにふしみの里は水こえて軒にかはづの聲きこゆなり
うたゝねの夢路の末は夏のあした殘るともなきかやり火の跡
むら雲はなほなるかみの聲ながら夕日にまがふさゝがにの露
なつぐさの草の葉がくれゆくほたる澤邊の水に秋もとほらず
何となく過ぎゆく夏をしきかな花おちはてゝ花ならねども
みそぎする河瀨に風のすゞしきは今夜をこめて秋や立つらむ

秋二十首

いつしかと荻のうは葉におとづれて袖にしらるゝ秋のはつ風

竹の葉を吹きうらがへすあきかぜに露の玉ちる夕ぐれのそら

萩原やあかつきのべの露しげみわくるたもとにしらぬ花ずり

うす雲のたゞよふ空の月影はさやけきよりもあはれなりけり

あさくらや木の丸どのにすむつきの光はなのる心ちこそすれ

まばらなる槇の板屋に影もりて手にとるばかりすめる夜の月

大かたの秋のなさけの荻の葉にいかにせよとて風なびくらむ

うす霧にあかしのうらはれやらでさだかにみえず沖の釣舟

くまなしやあさゆふ霧にはれずともかつらの里のあきの月影

難波がたさやけき秋の月をみて春のけしきぞわすられにける

續拾遺集第四句「一抽にしをるゝ」に作る、

たちばなのこじまがさきの月影をながめやわたすうぢの橋守

月影を浪路はるかにながむればあまのとまやは山のはもなし

夕暮はさびしき物かよもすがら月をながめて［うちねなむほどイ］

すまの海のあまの漁火ほのかにてなほ有明のひかりをぞまつ

山おろしにみぎりの浪はあらくともなほ霧ふかし郷の川かぜ

あけくれの空もたどらぬはつ鴈は春の雲路やわすれざるらむ

きり〴〵すうらむる聲も庭の荻のすゑこす風も秋ふけにけり

蟲のねはほの〴〵よわる秋のよの月はあさぢが露にやどりて

さほ姫のそめし緑やふかゝらむときはのもりは猶もみぢせで

身にしみてものあはれなるためしかな村雲まがふ秋すぐる暮

此御製第五句闕く、

夫木抄第一句「すまの浦や」に作る、

冬十五首

後鳥羽天皇

夫木抄第五句「冬のあかつき」に作る。

秋くるゝ鐘のひゞきはすがはらやふしみの里の冬のあけぼの
立田山もみぢの雨のふるまゝにあらしのおとの松にのみして
ちりはつるたつたの山の紅葉ばを梢にかへす木がらしのかぜ
冬くればみ山のあらし音さえてむすぼゝれゆくたにがはの水
竹の葉はおぼろ月夜に影さえてむら〳〵のこる庭のおもかな
さらにまたうすき衣に月さえて冬をやこふるをのゝすみやき
雪つもる有明のつきは月さえてまがきの竹のうらみどりなる
冬さむみひらの高ねに月さえてさゞなみこほる志賀のから崎
おもふにも哀なるべきとだちかなかた野の原のゆきぐれの空
今朝冬のあした三輪の杉むらうづもれて雪の梢やしるしなるらむ
ながむれば春ならねどもかすみけり雪露降れる遠きのゝさと

この比のときはの山はかひもなし枝にも葉にも雪しつもりて
しほ風やさむけかるらむ冬のよの吹飯のうらに千鳥なくなり
ふりつもる雪は朝日にむら消えて空にしられぬ軒のあめかな
けふまでは雪ふるとしの空ながら夕暮がたはうすがすみつゝ

戀十首

我戀はしのだの杜のしのべども袖のしづくにあらはれにけり
月夜にはこぬ人まつと厭へども曇るさへこそねられざりけれ
思ひ侘びねられぬものをなにと又松ふく風のおどろかすらむ
此くれとたのめし人はまてどこずはつかの月のさし上るまで
しら菊に人の心ぞしられけるうつろひにけり霜もおきあへず
いにしへに立ちかへりける心さへ思ひしらるゝまつよひの空

身をつめばいとひし人ぞあはれなる生駒の山の雲をみるにも

さりともとまちし月日も徒にたのめしほどもほどすぎにけり

住吉のきしにおふなりたづねみむつれなき人は戀わすれぐさ

待ちかぬるさ夜のねざめの床にさへ猶うらめしき風の音かな

羇旅五首

たれまでも旅の寢覺はあはれなり賤がをがみもこゝろ〳〵に

岩田川たにの雲間にむらぎえてとゞむる駒のこゑもほのかに

はる〳〵とさかしき峯を分けすぎて音無河をけふみつるかな

何となく名ごりぞをしきなぎの葉やかざしていづる明方の空

ひく松はまだ霧深くも立ちにけり明けゆく鐘は難波わたりに

夫木抄第一第二句「ひらまつはまだ雲ふかく」に作る、

山家五首

山ざとの柴の編戸にかげもりてほのかにかすむ春の夜のつき

霜ふかしそこともしらぬ山寺にはるかにひゞくれいの音かな

あきの月霧のまがきにすみなれて影なつかしきみやま邊の里

物ごとにさびしき宿のすまひかなまがきになるゝみねの白雲

なぐさめに煙ばかりはたえねどもさびしき物を冬のすみかは

夫木抄第二第三句「ひばりの床も冬がれて」に作る、

鳥五首

春くれば　みどりの空になくたづのながゐの浦に友さそふなり

しろき鷺ひとりはねじの聲すなりゆるぎのもりの暮がたの空

結びおきしひばりの床の草かれてあらはれわたる武藏野の原

風をいたみ小島が崎にすむ鷺はみえてもみえず浪のなみまに

白山の松のこかげにかくろへてやすらにすめるらいの鳥かな

祝五首

萬代のすゑもはるかにみゆるかな御裳すそ川の春のあけぼの

石清水たえぬながれの夏の月かざみのこけもむかしおぼえて

みかさ山みねの小松にしるきかなちとせの秋の末ははるかに

冬くればよもの木ずゑはさびしきに千世をあらはす住吉の松

千早振日よしの影ものどかにて浪をさまれる四方のうみかな

同八月一日新宮歌合

社頭祝

神まつるゆふしでかくる榊葉のさかえやまさむ宮のたまがき

池上月

ひろ澤の池にやどれる月影やむかしをうつすかゞみなるらむ

野邊蟲

みやぎ野のこはぎが枝に露ふれて蟲の音むすぶ秋のゆふかぜ

同九月御歌合

神祇

日影にもむかしわすれず神かぜやみもすそ川のさゞなみの聲

若草

春きてもつもりし雪は消えやらでむら〳〵あをしのべの若草

落花

みよしのに春の嵐やわたるらむ道もさりあへず花のしらゆき

菖蒲

夕風ははなたちばなにかをりきて軒ばのあやめ露さだまらず

時鳥

ほとゝぎすいづちいく田のもりならむ聲の名殘を雲に殘して

浦月

秋のつき涙路もとほくかげさえて心さへにもすまのうらかぜ

山嵐

うすもみぢなほ色まされ三室山あらしにつたふ秋のしぐれに

曉雪

ながむればくもりもやらず風さえて雪まの空にありあけの月

水鳥

池さゆる汀のつらゝ小夜更けてうきねのをしも遠ざかるなり

庭松

一本「池さゆる」の歌なく「月さゆる」じまが磯もかけて子を思ふ鴛の有明□□の歌を載す、

年は今あけぬとみればわが宿のみどりの松にはるかぜぞふく

同九月盡日歌合當座

月契多秋

千とせまでおもがはりすな秋の月老いせぬ門に影をとゞめて

暮見紅葉

暮れにけり秋の日かずもあらしやま紅葉を分けて入相のかね

曉更聞鹿

しのゝめや吹きさだまらぬ秋かぜに尾上の鹿の聲まよふなり

同十月一日歌合當座

初冬嵐

山河やいはまの水のいはねどもあらしにしるし冬のはつそら

一本「年は今」の歌なく「これもさすくしきれ宿のしるしとて軒端にすぐる松の下かぜ」の歌を載す、

暮漁舟

あはれなりふたみの浦のくれがたにはるかに遠き蜑の釣ぶね

枯野朝

思ふよりうらがれにけり楢柴やかりばのをのゝあけぼのゝ空

同日歌合當座

社頭霜

ちはやぶるかた岡山は霜さえて玉がきしろくゆふかけてけり

東路月

すぎきてもしばしやすらへ秋のそら清見が關の月をながめて

同十月七日新宮歌合

紅葉殘梢

つれなくも嵐にのこるこずゑかな下葉の色のゆくへなきまで

寒夜埋火

音さゆるよはのあらしも埋火のあたりは冬もなきこゝちして

同十一月八日影供歌合

暮山雪

冬ごもり春にしられぬはななれや吉野のおくの雪のゆふぐれ

古寺月

はつせ山あらしに鐘の音さえて月よりしらむありあけのそら

朝遠望

駒なめてうちいでの濱をみわたせば朝日にさわぐしがの浦波

同十一月十一日新宮歌合當座

社頭夕風

ちはやぶるあけの玉がき神さびて榊葉ごとになびくゆふかぜ

海邊霞

こゝろなき人もあらじや難波がたかすみに曇るはるの浪路に

古寺郭公

名にしおはゞしばしやすらへ時鳥たちばなでらの夏の夕ぐれ

杜間月

秋かぜはうはゞにさむしかしはぎのもりのわたりに有明の月

山時雨

立田山木ずゑのもみぢ秋くれてつれなき松になほしぐるなり

海濱重夜

霜さゆる月をながめてかやむしろ敷津の浦にあまたゝびねぬ

同十一月廿九日御幸住吉社三首(御熊野詣之次)

社頭祝

はるゞと思ふもとほし住吉やかねての松の千代のゆくすゑ

海邊雪

磯とほく涙ふきたつるしほかぜは雪にぞつらきすみよしの浦

羇中月

かねの音も聞えぬたびの山路には明け行く空を月にしるかな

同十二月歌合

曉尋千鳥

さよちどりゆくへをとへばすまのうら關もりさます曉のこゑ

山家如春

花やいそぐ日數やとしを惜しむらむこずゑ春たつふゆの山里

海邊歳暮

冬の磯に春は來にけり年波をたつとやいはむ歸るとやいはむ

正治二年第二度百首　月日未勘

霞

春のくる空のけしきはうすがすみたなびきわたるあふ坂の山

深山邊のまつのゆきまにみわたせば都は春のかすみなりけり

大方はかすみもやらぬあけぼのにはるをむかふる鹽がまの浦

海の上はかすみにくもる春の月に心ばかりはすまのあけぼの

梅が香はながむる袖ににほひきてたえ〳〵かすむ春の夜の月

一本第四句「春くる空に」新後撰集第五句「鶯の鳴く」に作る、

鶯

鐘の音にこぞの日數はつきはてゝ春あくる空にうぐひすの聲

春きぬと誰かはつげし春日山きえあへぬ雪にうぐひすのこゑ

谷に殘るこぞの雪げの古巣出でゝ聲よりかすむ春のうぐひす

梅がえの梢をこむるかすみよりこぼれてにほふうぐひすの聲

鶯のはつねをもらせはるやとき花やおそきとおもひさだめむ

花

さきにけりかぜのこぬまにけふ櫻心のほどにたをりつゝみむ

いかにして春さく花をしばしだに風にちらさでみよしのゝ山

櫻さくひらの高根のはるかぜは木のしたのみの雪げなりけり

花にくもる月みよとてや御芳野のこずゑをはらふ春の山かぜ

後鳥羽天皇

いはまづたひきえずながるゝ雪なれや花散りかゝる春の山水

郭公

時鳥しのびもあへずもらすなり早月まつまのこぞのふるこゑ
ほとゝぎす一こゑ聞けば夏のよのなごりの空にありあけの月
名のるなり雲居はるかにほとゝぎす朝倉山のたそがれのそら
郭公まだよひながらあくる夜の雲のいづくに鳴きわたるらむ
やどりせし花たちばなはそれながらまれになりゆく時鳥かな

五月雨

音羽川せきいるゝ水にみゆるかな涙さへくもるさみだれの空
この比のみつのわたりは軒にふくあやめにちかき五月雨の涙
あま人は袖ともわかずしぼるらむをじまが磯の五月雨のころ

五月雨はこやの篠屋にあらずともこれもほしあへず篠蟹(ぬイ)の絲
水まさる八十宇治河のさみだれに木ずゑをかよふまきの島人

草花

うちなびきさやかにみえぬ秋なれど荻ふく風ぞかたへ涼しき
風になびくかたをか山の女郎花たれよもぎふに思ひたつらむ
秋風の吹きにし日より篠すゝき忍びもあへずほにいでにけり
あきはまた鹿のねさそふしるべせよ小萩が原をわたる夕かぜ
おほかたは玉にまがひし白露もはぎにしたがふ秋のゆふぐれ

月

いかにいひいかにかすべき山のはにいざよふ月の夕ぐれの空
ながむれば木の間もりくる秋の月かぜにさがなき森(松イ)の下かげ

有明の月にはちかき名のみしてすむかひなしやにしの山もと

いまは秋山あるさとにすまひせじ月みる空にありあけもなし

はゝそはら木末をもとに染めかへて殘るくまなき森の月かげ

紅葉

大井河あらしの山のかげみえてそこの木末にもみぢしてけり

薄紅葉ちらす風にもつれなかれ時雨にそまぬ色もかひあらば

秋の時雨ときはの山をそめかねて嵐にぞかるよそのもみぢを

あきふかし染めぬ梢はあらし山しぐれにもるゝあをき一えだ

龍田山そむる時雨のあやめまで秋ももみぢもふかきころかな

雪

をがや原うらがれにけり冬の雪ふるからをのゝあけぼのゝ空

このごろは花も紅葉も枝になししばしなきえそ松のしらゆき

冬の夜のしのゝめの空は明けやらでおのれぞ白き山のはの雪

あやにくに時雨にたへし松の葉のこゝろよわきは雪の下をれ

さびしさに煙たえせぬしづの庵をとへかし人のゆきの夕ぐれ

氷

ふゆくればいしまのたつき氷しておもひたえたる山川のみづ

霜さゆる玉もの床にこほりしてはらひもあへぬをしの聲かな

あけがたは遠のみぎはに氷してかへりてちかき志賀のうら浪

うき草はなほあととめず冬のよの谷ゆく水はうすごほれども

冬の夜の河かぜさむみ氷しておもひかねたるともちどりかな

神祇

いすゞがはたのむ心しふかければあまてる神ぞ空にしるらむ
ちはやぶる神や知るらむもろかづら一方ならずかくる賴みを
たまがきや神のひかりもまさりゆく月のかつらの昔をりえて
跡たれし過ぎにしかたを思ふにも賴むしるしをみわの山もと
ちはやぶる庭火のまへにとる榊香をかぐはしめ山あゐのそで

釋教　五時

華嚴

いづる朝日山のたかねをてらせどもゆくへもしらぬ谷の埋木

阿含

しりそめしかせきが園の萩のはにひまなくおける無漏の朝露

方等

さまゞに教へし道のかひあれば終には深きさとりいでにき

般若

池きよき水にうつれるつきかげや昔といへるためしなるらむ

法華

いたづらにもるゝ草木もなかりけりいちみの雨の所わかねば

曉

はつせ山あけぬとつぐるかねの音に聲うちそふる嶺の松かぜ
秋の月ひかりぞまさる玉くしげふたみのうらのあけがたの空
くもりこしひばらの下の月影ものこるくまなしありあけの空
秋の夜の月のかげさすまきの戸をおしあけがたの横雲のそら
雲もなしながめは西にめぐりきて山のはちかきありあけの月

暮

三日月のほのめくくれの山の端はながめばかりも有明のそら
大井河ゐぜきに秋のいろ見えていざよふ涙のゆふぐれのこゑ
山おろしにこずゑの木の葉つきはてゝ色なき枝の夕時雨かな
山の端を繞る時雨の雲間よりとりあへず出づる夕づく日かな
ふる雪をたそがれどきの空めには花とや人のみよし野のさと

山路

春ゆけば霞のうへにかすみして月にはつらしをのゝやまみち
葉をしげみもるひまもなし秋のよの月おぼろなる足柄のやま
秋の月くまなきころはとまりせしひるにやかはる小夜の中山
ながめこしこゝろは秋の關なれやつきかげきよきふはの中山

立田山もとみし秋はうづもれて木の葉にまよふ岩のかげみち

海邊

ながむればあはぢのせとの夕霧にむらぎえわたるあまの釣舟
月きよき明石のせとの涙のうへにうらみを殘すありあけの空
蜑小舟ゆくへもしらぬ波の上にいづくの浦へさしてゆくらむ
磯の松あらしにたへぬ折しもあれあはれうちそふ涙の音かな
明石がたうらふくかぜに雪消えて涙よりにしにありあけの月

禁中

はるはたゞ軒端の花をながめつゝいづちわするゝ雲の上かな
うすみどりまだ夏あさき木の間より春をとゞむる藤つぼの藤
こゝのへのはぎのさかりはみかは水岩間の涙も花さきにけり

夜もすがら雲居の庭をてらすなるゐじのたく火は有明のつき
隈もなき雲ゐの月にやすらへばうしみつ迄に夜もなりにけり

遊宴

千世のはるたにの戸いづる鶯のはつねにぞ引く二葉なるまつ
結びあぐるやどの泉の水さえて夏も夏なきものにぞありける
秋の夜の月にぞうたふ舟のうち涙のうへなるうかれめのこゑ
雪ふかきあはづの原の暮がたはあはするたかも手に歸るなり
敷島ややまとことの葉かちまけに人のこゝろぞ人にこえぬる

公事

雲のうへにこれや春たつしるしなる袖をつらぬるけふの諸人
あふさかの山たち出でゝ雲のうへにかげさしのぼる望月の駒
あまつかぜ雲居の空をふくからに少女の袖にやどるつきかげ
もろ人のみたらし川にするが舞雲ゐにかへるあかつきのこゑ
としのくれ三世の佛の御名を聞きて心はれゆく雲のかよひぢ

祝言

三笠山いづる朝日のひかりよりのどかなるべきよろづよの春
春くればひとしほまさる住吉の松やちとせのためしなるらむ
千早振神ぞ知るらむふしておもひおきてかぞふる萬代のおく
龜のをのいはねをおつる白玉の數かぎりなき千世のゆくすゑ
むしろだやかねて千年のしるきかないつぬき川に鶴遊ぶなり

建仁元年正月十八日影供御歌合

遠島朝霞

後鳥羽天皇

春がすみたてるやいづこ朝日かげさし行く舟をまつがうら島

隣家夜梅

梅が香のかすめる月ににほふかなよその垣ねに春かぜぞふく

山家殘雪

まれにだに人もとひこぬ杉の庵の軒端にのこる春のあわゆき

同二月老若五十首御歌合　十六十八兩日有評定被付勝負

春

春は今ふゆをこめてやたちぬらむ霞にもるゝみねのまつかぜ

朝がすみたてる山邊ぞなほさゆる木のめも春の雪はふりつゝ

わだの原遠の霞のはるのいろに八十島かけてかへるかりがね

武藏野のきゞすよいかにこや思ふ煙のやみにこゑまよふなり

夫木抄第二第三句「きゞすやいかにこな思ふ」第五句「こゑまどふなり」に作る、

新續古今集第五句「しがの山ごえ」に作る、

續後撰集第四句「枕にくもる」に作る、

都人そことも（しら）いはずうちむれて花にやどかるしがのゆふぐれ（やまごえ）

花にほふかすみの空をながむればおぼろげならぬ春の三日月（夜のイ）

あたら夜のまやのあまりに眺むれば櫻にくもるありあけの月

花ゆゑに志賀の故郷（花園イ）けふみればむかしをかけて春かぜぞ吹く

わけてこの吉野のはなの惜しきかはなべてぞつらき春の山風

思ふとも明けなむ空はいかゞせむ夜のまは惜しめ春つぐる鐘

夏

見渡せば名殘はしばし霞めども春にはあらぬけさ（そらイ）のあけぼの

久方の月のかつらにあふひ草かけてぞたのむ加茂のかはなみ

郭公くもるこよひのむらさめにまだしき聲やよにふりぬらむ

あやめぐさ岩がき沼の根（に）をたえず（てイ）けふは袂のにほひとぞなる

一本「あやめぐさ」の歌の次に「時鳥のきの橘匂ふが

にえや忍ばれぬをちかへりなく」の歌を載す、

萬代集第四句「淀のあたりの」に作る、玉葉集第五句「蟲のこゑごゑ」に作る、

ほとゝぎす思ひもわかぬ一聲にあけぬるかたはしのゝめの月
夏の月しばしみるまもあらばこそくもらばくもれ山のはの空
時鳥雲のはつかにきこゆなりよどのわたりのむらさめのそら
秋ちかきしづがかきねの草むらに何ともしらぬむしの聲かな
夏もまたをじまがいそのかぢ枕うきねの波にあきかぜぞ立つ

秋

秋立ちてけふみかの原風さむしやゝたなばたにころもかせ山
荻の葉にあきかぜ吹きぬともすればかはらぬ月の影ぞ涼しき
秋風は身にしむ物と荻の葉に吹くよりこそはならひそめしか
住吉の松にあきかぜ小夜ふけてうらよりをちに月ぞさやけき
をぎの葉におく白露の玉ゆらも聞きしのぶべき秋のかぜかは
秋の色はまだ一しほのもみぢばに心してふけ山おろしのかぜ
秋やとき時雨やおそき三室山染めぬこずゑにあらし吹くなり
くれて行く秋のなごりはおほあらきの森のこずゑに有明の月
ながづきや秋の末葉に霜おけば野はらの小萩かれまくもをし
尋ねみよいかなるせきの關守かつれなく暮るゝ秋をとゞむる

冬

津の國のこやもあらはに霜がれてやへふく軒に時雨ふるなり
この比はさ夜の時雨もきゝわかず木の葉になるゝみ山べの里
冬に猶かさねて空のかぜさえて時雨にかはるみねのしらゆき
ときはなる松のみどりを吹きかねてむなしき枝にかへる木枯
見わたせば涙こす山のすゑの松こずゑにやどるふゆの夜の月

から崎や氷に涙のおとたえてみぎはにのこるさ夜のまつかぜ
高さごのまつふく風ぞうもれゆく尾上の雪やふりまさるらむ
すまの浦にことぞともなき煙かな雪のあしたのあまの藻鹽火
冬ふかみとやまのあらしさえ〳〵て裾野のまさき霰降るなり
西の海のあらいそなみによる竹の一夜になりぬ冬の日かずも

夫木抄第一句「冬ふかき」に作る、夫木抄第五句「冬の日數は」に作る、

雜

心をし天（ばイ）てる神にかけまくもかしこきひかりくもりなき世に
淡路島ふきかふ（迷イ）すまのうら風にいくよのちどり聲かよふらむ
をしめどもつれなくあけぬ夜半の月名殘を山のはには殘して
とひもこぬ人の心を三輪のやましるしの杉の名こそをしけれ
ながむれば松の木影のほの〴〵（にイ）とあくるもつらきうら島の月
濱びさし涙のまに〳〵ながむればみゆるこじまに有明（のイ）のつき
吳竹のふしもさだめずねもいらず鳥のなくまで月をこそみれ
言とはむ誰かはこゝに角田川名にしおふ鳥はありやなしやと
都人さびしきやどのまつかぜに月をばみるかとだにとへかし
すみよしの松はいく世とことへば岸うつ涙ぞ磯にこたふる

同三月内宮御百首

春二十首

朝日さすみもすそ河の春の空のどかなるべき世のけしきかな
見わたせば今朝はかすみの志賀の浦うら吹きそむる春の初風
たつた川柳が枝のはるかぜにこほりきえてはさゞなみぞたつ
御芳野のこぞのやまかぜなほさえて霞ばかりの春のあけぼの

鶯のはねしろたへのあはゆきをきえねと春のかぜはふきつゝ
淡雪のいまだふるのゝ下わらびおのれもえ出て春はしるらむ
難波津にさくやこの花あさがすみ春たつ波にかをるはるかぜ
山がつのかきほの草のうすみどりやがてもなるゝ春の露かな
朝霞もろこしかけてたちぬらしまつらがおきの春のあけぼの
かへるかり都の雲をはるかけてなれこし空のかたみともみよ
梅が香をまやのあまりにさそひきてありとや袖に春風ぞふく
櫻ばなそれともえこそしら雲のなべてかゝれるやまの夕ぐれ
歸るかりたびの空にもわするなよよし野の花にかすむよの月
いかにせむはなに山風吹きぬなり物おもへとのみよし野の春
花の色は昔ながらにほへどもたれかはとはむ志賀の浦（春イ）かぜ
まがふとも今はいとはじ春のかぜ花より後のみねのしらくも
待ちわびぬ（ながめイ）まれにもとひこ都人やよひの月のありあけのころ
いかにせむよにふるながめ柴の戸にうつろふ花の春の暮かた
春の名殘よし野のおくにたづぬれば花の青葉に山かぜぞふく
あづまぢのさのの船橋あすよりやくれぬる春を戀ひ渡るべき

夏十五首

なにとなくすぎこしかたのこひしきに心ともなふおそ櫻かな
ほとゝぎすさて山鳥のしだりをのながゝつらきさ夜の一聲
子規まつ宵ながら明けにけりさもあらぬ鳥の音のみきこえて
なみだにはこれをからなむ時鳥はなたちばなのむらさめの露
むすぶ手の露に月すむ山の井のあかでもあくる夏のそらかな

里人のおりはへほせる夏ごろもなぬかもすぎぬさみだれの比
まばらなる蜑の苫屋の五月雨にかづかぬ袖をほしぞわづらふ
郭公月見よとてのしるべかな啼きつるかたのありあけのそら
しほたれぬにほの水海あまの袖ほしえぬものを五月雨のころ
すぎぬなり夜半のねざめの郭公こゑをばしばし月にのこして
日にみがく玉かとぞみるゆふだちのはれゆく跡の野べの白露
みだれあしの下葉すゞしく露はゐて澤邊の水にかよふ秋かぜ
ながむれば秋ちかしとのしるしかな鳥羽田の露に螢とぶなり
ふるさとの庭のさゆりの花におく露も秋なるかぜわたるなり
夏と秋とゆきかふ空やふけぬらむやゝ露おもる夜半の袖かな

秋二十首

袖のうへに秋しれとての光かな木のまの月のぬるゝがほなる
いかにしていくかもあらぬ秋風の身にしむ色を深くそむらむ
山ひめの衣あきかぜふくからに色ことゝにのべぞなりゆく
露しげき鳥羽田の面の秋かぜに玉ゆらやどるよひのいなづま
とこ世より山とびこえてくる鴈のつばさにのこる故郷のくも
秋をへて物おもふ事はなけれども月にいくたび袖ぬらすらむ
夜もすがらあきのありあけを水無瀬川結ばぬ袖に宿る月かな
さをしかの入野の野べのはつ尾花たれ手枕にむすびそめけむ
おもふ事わが身にありや空の月かたしく袖におけるしらつゆ
いかならむときかわすれむ宮城野の萩の上葉の露のつきかげ
一夜ぬる野べの篠屋のさゝまくらかごとがましき袖の露かな

たがむかしすみこし里の秋風やなほふか草の野べに吹くらむ

をじか鳴く秋の山田のかりよりにいなばの風□□□□

來てみれば明石の浦の夜半の秋おもひしよりもすめる月かな

うきねするねざめの秋をながむればむかしの月に松風ぞ吹く

秋の雲千さとをかけて消えぬらし行く事おそき夜はの月かな

白露のおくてのいなばかりそめにやどるともなき夕月夜かな

春の夜のおぼろ月夜のおもかげをしばしみせける夕霧のやど

あきふかしたれ淺茅生にひとりかも夜さむの衣月にうつらむ

もみぢ葉をぬさにたむけてゆく秋の空の名殘を牡鹿なくなり

冬十五首

わが袖にいくたび月のやどるらむくもれば晴るゝ初時雨かな

此御製第五句闕く、

やどりこし露の行方をとひかねて霜になれぬるむさしの、月

冬のきて幾日もあらぬをながむれば空さえわたる霜の上の月

ねざめとふかけひの水もみねの松も雪に音せぬやまの奥かな

かりにこしうづらの床もあれはて、冬ふか草の野べぞ淋しき

立田山木の葉吹き拂ふ木がらしにひとりつれなき嶺の松かな

すが原やふしみの空にかぜさえて雪げになりぬをはつせの山

さびしさも世のうきよりはいかゞせむみ山のおくの柴の下草

霜むすぶ庭のかるかやほの〳〵とまがきのくれにのこる秋風

山風のふしみのすそにおろす雪それぞまことに空にしられぬ

しほ風の吹上の浦のともちどりいく夜さえたる月をみるらむ

月ならぬ雪も有明の冬のそらくもらばくもれさらしなのさと

舟かよふやそうぢ川のかはかぜにたれかこじまの雪の夕ぐれ
けぬが上にふりしけみ雪あすよりの春風ふかば稀にこそ見め
をしみこし花やもみぢの名殘さへさらにおぼゆる年の暮かな

祝五首

雲近く飛びかふたづの聲までものどけき空のしるしとぞ思ふ
萬代は浪こそかけてかぞふらめはまべの松のゆくすゑのかげ
風吹けばをばなかたよる吳竹のしげきよごとに千世ぞ籠れる
我宿に千とせをかけてすむ月のひかりをちぎれ庭のまつかげ
四方の海の浪に釣するあま人もをさまれる代の風はうれしや

神祇五首

つきもせず都のそらに吹きかよへ神路の山の千世のはつかぜ

神風やいせの濱邊のあけぼのにかすみふきよる浦のはつかぜ
神かぜや空なる雲をはらふらむひと夜も月のくもるまぞなき
あきのそらのどけき浪につき冴えて神かぜさむしいせの濱荻
みもすそやたのみをかくる神風の心にふかぬときのまぞなき

雜二十首

引きてうゑし人のゆくへはしらねども木高き松の風の音かな
秋草のかりねのまくらいくよへぬ下葉のつゆに袖ぬらすとて
草まくら都のあきをさそひきて月におぼゆるふるさとのそら
こよひたれ松と波とにゆめさめて吹上の月にそでぬらすらむ
わするなよ露にしをるゝたび衣きつゝもなれぬあづまぢの月
清見がた有明の月のかげさえてせきぢの鳥もこゑさかるなり

萬代集第二句「旅寢の枕」第五句「袖ぬらしつゝ」に作る、

旅の空おなじ雲路をかよひきて月をともなふふるさとのかぜ
哀なるあまの磯屋もいかゞせむさらで世にふる方しなければ
すまの浦ふるきせきやを月ぞもるかよふ千鳥はきく人もなし
ふる里をたゞ松かぜぞひとりふく月はみるやととふ人はなし
山ふかみ柴のかりほの寝覺をも月はさすがにとはずやはある
住の江の松のしづえに涙かけてこずゑに殘るおきつしほかぜ
水馴棹さしてそれとはなけれども過にしばかり戀しきはなし
月のすむをじまの松のかぜの音はなれたる蜑も如何に忍ぶや
人しげきみやこの空におもふかないかにみ山の月はさびしき
事ぞともなきだにぬるゝたもとより戀や恨のながめをぞ思ふ
我のみとむすぶ深山の柴の庵に月はもとよりすみなれにけり
大空をその事となくながむればあきなる風ぞそでにふきける
松にふくみ山の風のはげしさも覺えぬまでに住みなれにけり
おもふべしくだりはてたる世なれども神の誓ぞ猶もくちせぬ

外宮御百首

春二十首

宮河のはるたつ空のはつかぜにうち出づる涙の花やちるらむ
たにかぜのうぐひすさそふたよりにや山里人も春を知るらむ
はるの來てなほふる雪はきえもあへず杉の葉しろき三輪の曙
みやまにはまだゆきふかき松のかぜすそ野に春の氷とくなり
かすめどもよしのゝ雪のなほさえて松の葉しろき古里のはる
唐崎や春のさゞ涙のどかにてかすみになりぬにほのみづうみ

あさがすみ春のしきつの浦風にみどりにかよふおきの浪かた
鴉の海やかすみの空にこぐ舟の浪にきえゆくしがのあけぼの
物思はぐたへてもいかゞながめましふけゆく月の春の景色を
春霞立ち出でゝみよよしの山今いくかありてさくら咲きなむ
かすが山こずゑはかすむ峯のまつももとの岩ねに春雨ぞ降る
時しあればかへるならひのはるのかり涙ぞ花の枝にを□
さくら花いまか咲くらむあしびきの山下風のにほふあけぼの
かすみたちこのめはるさめ古里の芳野の花もいまや咲くらむ
かぎりなきあはれは春とみゆるかなよもの山邊の夕暮のそら
かすみしくとこよの方を詠むればくれゆく山にきゆる鴈がね
かへる鴈の夜半のなみだやおきつらむ櫻露けき春のあけぼの

此御製第五句闕く。

野も山もをさまれる世の春風は花ちるころもいとひやはする
三芳野の春はやよひに暮れにけり櫻になりぬ四方のやまかぜ
さほ姫もくれゆく春を惜しむらむわきて霞めるけふの空かな

夏十五首

きてみればなにはの夏の朝ぼらけ春こしかたへかへるうら風
なれ〳〵し春の袂の花の香もとほざかりゆくなつのころかな
みしま江のひしの浮葉にゐる玉をみがくか夏の月もさやけき
おのづからならのかげもる夏の月いかで下葉の露にすむらむ
ぬれつゝやひとりゆくらむ郭公とばだのをのゝ雨のゆふぐれ
なつの夜のふかき梢のかぜふけばくもらぬ月にむら雨ぞふる
故郷のたちばなそゝぐ庭のあめに鳴くほとゝぎす昔こふらし

夏のそらきよ瀧川のいかだしやいく夜も月にすゞみきぬらむ
郭公なきつるかたの山のはになごりがほなる夜半のまつかぜ
ほとゝぎす月にちぎりや有明の山よりいづるこゑのさやけさ
ほとゝぎすこゑやむかしのいそのかみふるき都の村雨のそら
蓮葉ににごらぬ露の玉こえてすゞしくなりぬみなづきのかげ
さゝがにの絲に玉ぬく夕ぐれはしかこそなかね秋ぞ來にける
ほたるとぶもりの下ぐさ秋かけてまだき色づくみなづきの空
六月やたけうちそよぐうたゝねのさむる枕にあきかぜぞ吹く

秋二十首

袖の上に露たゞならぬゆふべかなおもひしことよ秋の初かぜ
あはれをば荻の上葉になしはてゝしらずがほなる秋のはつ風
ときは山やまたちならす鹿の音をとぶらふみねの松の風かな
さをしかのいる野のすゝき片よりに風にみだるゝ蟲の聲かな
袖のつゆをいかにかこたむ言とへどこたへぬ空のあきの夕暮
我袖にあきなればとておく露をことありがほにやどる月かな
やまざとは月みよとてやおのづから空ゆく雲をはらふ秋かぜ
しのにおく露ふかくさのあきかぜに鶉なくなる野邊の夕ぐれ
今はたゞおもひもいれで月はみむ我がやどからの秋の風かは
鹿のねも聞かぬ寢覺のかぜだにも深山の月はさぞなさびしき
かり人もあはれしれかし秋かぜに妻こふ鹿のゆふぐれのこゑ
秋ふかきみかきが原の夕露にさもあらぬ袖をしぼりわびぬる
あきの田のかりほの庵に露おきて隙もあらはに月ぞもりくる

草まくら夜半のあはれはおほえ山いく野の月にさをしかの聲
すみわびぬこととひこなむみやこ人み山の庵の秋のくれがた
たかまどの尾上のみやはあれぬともしらでやひとり松蟲の聲
すがはらやふしみの秋のくれがたにあれまくをしむ蟋蟀かな
長月のありあけがたの月かげに秋をやかこつさをしかのこゑ
野べの色はおもひしよりもうらがれて霜をうらむる蟋蟀かな
秋ふかき有明がたのよものあらしみ山の月に木の葉ふくなり

冬十五首

さをしかのをの〻草臥あれぬらむ秋はいくたの冬のあけぼの
冬のきてもみぢふきおろす三室山あらしの末にあきぞ殘れる
霜ふかき夜半のあらしやこほるらむむすぼゝれゆく嶺の松風
みよし野のしぐれも日數故郷にかよふあらしや雪げなるらむ
ふゆさむみいはまのなみは氷してきよたき川に月ぞのこれる
あしびきの山にしろきはかきくもり昨日の空に降りし雪かも
天の川河瀨にやどをかりごろもかた野の冬のゆきのゆふぐれ
ふるさとは軒のいたまに月もりてあらしにのこる冬の夜の夢
雪しろくかひのしらねのさゝのいほやどれる袖にやどる月影
冬さむみあさあけの袖のこほるかな軒端の松の雪のしたかぜ
とりかへる谷のとぼそに雪深しつまぎこるをの道やたえなむ
ありあけの月さへあまりさゆるかな庭の淺茅の雪のしたかぜ
ひらの山高ねの雪のけぬがうへにまたふるものは霰なりけり
たえ〳〵にのこれる嶺の椎柴にふけゆく冬の日かずをぞみる

松かぜに又こむこゝろをたのめてやふゆもいなばの山のしら雪

祝五首

關守も關の戸うとくなりにけりをさまれる世にあふさかの山

和歌の浦の蘆間に潮や滿ちぬらむ千代をこめたるたづの諸聲

かぜふけばなびきをれふすなよ竹の末葉の露もいく千世の數

浪かゝるいその岩根の松が枝のかはらぬ色にうらかぜぞふく

しほの山さし出の磯のしきなみに千とせをいのる友千鳥かな

神祇五首

春の色をけふ宮川の杉の葉に吹きくるかぜもかみさびにけり

宮河やいつもみどりの杉の葉にいま一しほのはるかぜぞふく

ひさかたの空ゆくかぜに雲きえてつきかげさむし宮河のあき

すゞか山いせのうらわの秋のなみやどれる月をよする春かぜ

世々へてもかみなみ川にたえぬ涙たえて忘るゝまなく時なし

雑二十首

むかしには神もほとけもかはらぬをくだれる世とは人の心ぞ

都びとたのめぬやどの槇の戸になにのならひの庭のまつかぜ

ながめつる明石の月のなごりかな島がくれゆく冬のあけぼの

月をのみ深山のおくにむすぶいほもとよりたてる庭の松かな

草まくら床に寢覺をすがのねのながゝし夜を月ぞとひける

詠めわびぬかくてふる日を又もありやみるらむ物を空にすむ月

はつせ山あかつき方の鐘の音にうちおどろきて月をみるかな

山ざとの寢覺もよほす松かぜもすみなれぬまぞ夢はのこりし

たれみよと人もおとせぬ奥山のまきのはわけにひとりすむ月

おなじつゆの袖や草葉におきわけてほすましもなき旅衣かな

しほたるゝすまの浦わはよる涙の幾夜の月をやどしきぬらむ

つたしげるうつの山邊の山かぜにたびねの夢を結びわびつゝ

よそにみしたかねの雲に今宵かも衣かたしきあかしつるかな

今宵たれあかしのせとにうきねして浦わの月に袖ぬらすらむ

何となくすぎこしかたのながめまで心にうかぶゆふぐれの空

からごろも袖しくうらのとまやかたならはぬ磯の松の風かな

ふるさとにまてとつげこせうつの山みやこへかよふ有明の月

くさまくらたびねの夢の關守は野にもやまにも松にふくかぜ

かりにてもおもひおこせよ都人おなじこゝろに月はみずとも

わかの浦のあしまの涙のたちかへり昔に似たるたづの聲かな

同三月十八日影供御歌合

梅香留袖

梅が香をながめし袖にとゞめおきてむなしき枝に風ぞ殘れる

翠柳誰家

ぬし知らぬそともの柳これぞこの靡くにつけて春過ぐるもの

水邊躑躅

やまがはの苔のいはねの岩つゝじ春にもあへぬはなの色かな

故郷山吹

ふるさとの春やむかしの春の月われもとの身とさける山ぶき

雨中藤花

たそがれのたづ〳〵しさに藤の花をりまよふそらに春雨の空

山家暮春

くれぬとも霞はのこれ柴の戸のしばしも春のわすれがたみに

同三月盡新宮撰歌合

霞隔遠樹

一本第一句「うらの松の」に作る、

うらの松色やまさるとみればかすみぞたてる志賀のから崎

羇中見花

かぜ吹けば花は波とぞこえまがふわけこしたびもすそ野の松山

雨後郭公

松下納涼

此二首題ありて歌闕く、

山家秋月

柴の戸やさしもさびしきみ山べの月吹く風にさをしかのこゑ

湖上曉霧

志賀のうらやにほてる沖は霧こめて秋もおぼろの有明のつき

夫木抄第二句「にほてる沖に」に作る、

嵐吹寒草

草のはら露のやどりを吹くからにあらしにかはる道芝のしも

雪似白雲

雪やこれはらふ高間のやまかぜにつれなき雲の峯にのこれる

寄神祇祝

かみかぜや八重の榊葉かさねてもみもすそ河の末ぞはるけき

遇不逢戀

同四月廿六日御會　鳥羽殿初度

池上松風

松かぜにうちいづる波の音はしてこほらぬ池の月にこほれる

同四月晦日影供歌合

曉山郭公

ほとゝぎす聲ははつかの山の端の有明の月にしばしやすらへ

海邊夏月

明石がたねぬにあけぬと詠むれば浦よりつたふ空のつきかげ

忍戀

風ありて歇閑く、

一すぢに色に出でじとおもふにはしのぶ心にかつものぞなき

同日當座御會

竹風夜涼

夏もなほかはらぬ月をしるべにてあきかぜかよふ庭のくれ竹

山家五月雨

はれゆかむ程をも今は松のかどさしもつれなきさみだれの空

同五月日城南寺歌合

社頭祝言

つたへくる秋の山邊のしめの内に祈るかひあるあめの下かな

雨中時鳥

雲のぼるおのがさつきの村雨に聲をあらそふほとゝぎすかな

野亭水涼

せく清水ふかき夏野の草の庵にもりきて月のかげぞとめける

同六月千五百番御歌合

春二十首

春たてばかはらぬ空ぞかはりゆく昨日の雲かけふのかすみか

ふゆと春とゆきあふ坂の松がえにかすみをしのぎ淡雪の降る

かつらぎや高間の山に雪消えてさえしあらしは春のはつかぜ

しろたへの衣はるさめかきくもりふる野の若菜今やつむらむ

たをりけむ軒端の梅をたづぬれば花もえならぬ袖の香ぞする

はるかぜのさそふか野べの梅がえになきてうつろふ鶯のこゑ

池水のみぐさにおけるよるの霜きえあへぬうへに春雨ぞ降る

ふかき夜のあはれはしるや春の月しくものもなき有明のそら

宵のまはほのめく月のしかすがに霞みも果てぬ春のおほぞら

月よゝし夜よしと誰につげやらむ花あたらしき春のふるさと

みよしのゝ吉野の山のはなざかり雲より下にはるのしらくも

鴈かへる峯のかすみのはれずのみうらみつきせぬ春の夜の月

かへるかり霞のうちに聲はしてものうらめしの春のけしきや

よし野山雲にうつろふ花のいろみどりの空にはるかぜぞふく

ちらばちれよしや芳野の山櫻吹きまよふ風はいふかひもなし

花は雪とふるの小山田かへしても恨み果てぬるはるの夕かぜ

霞みゆくやよひの空の山の端をほのぼのいづるいざよひの月

世の中に絶えてあらしのなかりせば花に心はのどけからまし

一本「世の中に」の歌なく「芳野山てりもせぬよの月影に檜の花は雪とちりつつ」の歌を載す、

かぜふけば花の白雲やゝ消えて夜な〳〵はるゝみよし野の月
古の春さへけふはつらきかなふるとていかゞかへりそめけむ

夏十五首

はる山のかすみの衣ぬぎすてゝけさはみどりの夏のあけぼの
夏のそらくもれる夜半の卯のはなの月をやどせる玉川のさと
ほとゝぎす心してなけたちばなの花ちるさとのさみだれの空
郭公なかずばたゞにふけなゝむ夢のたゞぢもまちこゝろみむ
まだ宵の月まつとても明けにけりみじかき夢の結ぶともなく
夕月夜しばしやどれる山の井のあかぬひかりの袖にすゞしき
心あてにきかばやきかむほとゝぎす雲路にまがふ峯の一こゑ
おもひ入りてながむる空のむらさめにあまり程なき時鳥かな

續千載集第五句「夕ぐれの空」に作る、

一本「夕月夜」の歌の次「たちよらば涼しくやありとむすぶ手の雫に濁る井手の玉水」の歌を載す、

筏士のやみをもわかぬみなれ棹さすがに夏はつきをまつなり
ともしする影をよな〳〵深山木のこりずも鹿のめを合すらむ
風をいたみ蓮の上葉にやどしめて涼しき玉にかはづなくなり
澤水のくさ葉にやどをかりごものおもひみだれてゆく螢かな
柳かげすゞみにきたるからごろもならす袂になるゝかはかぜ
夏ふかみ草の葉がくれつゆはゐてしのびゝ〳〵の秋のはつかぜ
みそぎ河瀨々の玉ものみがくれてしられぬ秋や今夜きぬらむ

秋二十首

かぜの音に秋はけふより立田山よはにや夏のひとりこゆらむ
秋たちて昨日にかはる波かぜにすゞしくなびくいせのはま荻
しのすゝきまだほに出でぬ夕月夜さすがに秋の景色なるかな

一本「おもひ入りて」の歌なく「足引の山時鳥をちかへり雫にぬるる夕暮の空」の歌を載す、夫木抄第五句「月をまつかな」に作る、

續千載集第五句「こよひ立つらむ」に作る、

七夕のくものたもとやぬれぬらむあけぬとつぐる秋かぜの聲
日かげさすをかべの松の秋かぜに夕ぐれかけて鹿ぞ鳴くなる
このゆふべ風吹きたちぬ白露のあらそふ荻をあすやかも見む
女郎花枝もとをゝにおくつゆをまちとる風にむしうらむなり
わけゆけばしげくも露のみゆるかな月吹きやどす野べの秋風
あはれ昔いかなる野邊の草葉よりかゝる秋風吹きはじめけむ
野べにおける露をば露とながめきぬ花なる玉か鴈のなみだか
ものやおもふ雲のはたての夕暮にあまつそらなる初鴈のこゑ
秋の田のしのにおしなみ吹くかぜに月もてみがくつゆの白玉
小山田のいなばかたより月さえてほむけの風に露みだるなり
めぐりゆく秋やはもとのあきの空月ぞむかしのしがのふる里

おなじくばあはれしられむ人もがな鹿とむしとの秋の夕ぐれ
秋の蟲の手玉もゆらにおるはたを誰きてみよとのべの夕ぐれ
ますかゞみみるめのうらのよはの月こほりをよする秋の潮風
玉ぼこの道のしば草うちなびき古きみやこにあきかぜぞ吹く
あき山の松をばしのげ立田姫そむるにかひもなきみどりなり
けふこそは秋の日數もくれはどりあやなし名のみ長月のそら

冬十五首

かぜさえてけさより冬をなら柴の狩場のをのに時雨過ぐなり
秋暮れて露もまだひぬ楢の葉におして時雨のまづそゝぐなり
冬きぬと嵐に菊の露のまにぬれてほしあへず今朝ぞうつろふ
紅葉するほどは時雨のむらくもに空ゆく月のめぐりあふらむ

はれくもり時雨ふるやの板間あらみ月をかたしく夜半のさ筵
からにしき秋のかたみをたゝじとや霜まで殘る庭のひとむら
み山ふく四方の木がらしさえそめて槇の葉しろく初雪ぞふる
里人のいほりにたけるしひしばの煙吹きしく山おろしのかぜ
おしてるや難波のあしの下がくれかりねもる鴨の霜になく聲
うらちかき末のまつやま雪ふれば冬よりうへを波やこゆらむ
雪のあした木の下風はさむけれど櫻もしらぬはなぞちりける
月かとてはらはねば又しろたへの袖にぞさゆるふかき夜の霜
夫木抄第二句「岸の小松に」に作る、
まきもくの嶺（岸）の小松に雪ふればひばらがすゑに雪（雲イ）ぞかゝれる
杉の葉のみどりもみえずふる雪をわたるあらしの跡の一しほ
冬くれて今年もけふに筑波根の木のめもかねて春めきにけり

祝五首

よろづよとみもすそ川の春のあした涙にかさねてたつ霞かな
よろづよとみたらし河の夏のよに秋ともすめるやまのはの月
よろづよとみかさの山の秋風にのどかにみねの月ぞすみける
よろづよとみつの濱かぜうらさえてのどけき涙に氷ゐにけり
萬代とみくまのゝ浦の濱ゆふのかさねても猶つきせざるべし
萬代集第二句「山の下水」に作る、

戀十五首

足曳の山したみづのわきかへり色にはいでじ木がくれてのみ
神無月そでのみしたのはつしぐれ人のこゝろのあきの一しほ
續古今集第二句「なだの鹽くむ」第四句「しをるに袖の」夫木抄第
蘆のやのなだの鹽屋（くむイ）の海士人もしをるゝ袖のいとまなきまで
いづら秋のながき（しイ）てふ夜は名のみしてつきぬ名殘ぞ有明の月

五句「いとまなきかな」に作る、

つれもなき人をば頼むかひなくてくるゝ夜ごとに秋風ぞふく

詠むればこぬ人またるわびつゝも今宵の月にあかずかもねむ

君はしるやまつ夜あまたに積りきて袖に有明の月をみるとも

うらみよとなれる夕のけしきかなたのめぬ宿の荻のうはかぜ

續古今集第五句「夕暮の空」に作る、

荻の葉に身にしむ風はおとづれてこぬ人つらきゆふぐれの雨

續拾遺集第二句「よひ〳〵も」に作る、

うつゝこそぬるよひ〳〵の難からめそをだにゆるせ夢の關守

濱びさし久しくもみぬ君なれや逢ふ夜をなみの涙まなければ

かず〳〵におもふ心はおほよどの松をうらむる涙のおとかな

つれなくばたゞことうらにたて煙わがすむ方は月ぞさやけき

白露もあけゆくほどは野邊におく時ともわかぬ袖のうへかな

續後撰集第二句「月みるかひは」に作る、

長月の月みてかひはなければもたのめしものはありあけの頃

雜十首

一本「ゆふだすき」の歌の次「荒磯海のやむ時もなき浦風に浪がくれゆく蟹の釣舟」の歌を載す、

ゆふだすきよろづよかけてすみよしの神や種まきし岸の姫松

都にもみしは月ぞとおもへどもそゞろにぬるゝたびの袖かな

すまの浦にまつ夜ふけゆく月影を涙のあなたに誰をしむらむ

みやこ人とはで月日はすぎの庵の軒になれたるみねの松かぜ

これやさは都にてみしそらの雲それをかたしく嶺のたびぶし

旅寢する夜半のあらしに夢さめてうちながむれば有明のつき

わするなよかゝる寢覺の夜半の秋いかなる空の月をみるとも

月のこるあしやの里の有明にむかしに似たるあまのいさり火

誰みよとあれたる宿の松かぜにひとり住みけるあさぢふの月

あさゆふにあふぐこゝろを猶てらせ涙もしづかに宮川のつき

同七月廿七日當座御會　和歌所

暮山遠鴈

はつかりのとこよの秋をすみすてゝ山路はるかに夕ぐれの聲

同八月三日影供御歌合　和歌所初度

初秋曉露

きのふまでかゝる露やは袖におく秋來にけりなあかつきの風

關路秋風

なつだにも月は秋なるきよみがた浪ふくかぜのこのごろの空

旅月聞鹿

夜をかさね月に朝たつたび衣きつゝなれゆくさをしかのこゑ

故里蟲

とぶ鳥のあすかの宮のきりぎす月やむかしの秋に鳴くなり

初戀

ならはずよ秋なればとておくか露片敷く袖のうちしめるまで

久戀

今こむといひしばかりを頼にていくなが月をすぐし來ぬらむ

同月十五夜撰歌合

月多秋友

ゆく末の千年のあきはいくめぐりなれても夜半の月を眺めむ

月前松風

庭の松の木の間もりくる月影にこゝろづくしの秋かぜぞ吹く

月前擣衣

あさぢふの月吹くかぜに秋たけてふるさとびとは衣うつなり

海邊秋月

題のりて歌閑く、

湖上月〔明イ〕

から崎やにほのみづうみの水の面にてる月浪を秋かぜぞ吹く

深山曉月

新續古今集詞書「深山月といふ事をよませ給うけるに作る、」

すみなれてたれわが宿とながむらむ吉野の奥にありあけの月

野月露冷

月すめばつゆを霜かとみやぎ野の小萩がはらはなほ秋のかぜ

田家見月

やどちかき山田の庵（かりイ）のいなむしろ誰しきなれて月をみるらむ

題ありて歌閑く、

河水似氷

同夜當座御會　和歌九品

月前鴈

かりのくる嶺の秋ぎり空はれて羽しろたへにすめるつきかげ

月前旅

旅の空秋のなかばをかぞふればこたへがほにも月ぞさやけき

月前戀

たえずとふ月幾たびかながめしてこぬ夜あまたと歎きわぶらむ

同九月五十首御會

初春待花

雪きえてけふよりはるをみよしのゝ山も霞みて花をまちける

山路尋花

雲かゝるこずゑを花とたどりきてまだころあさきしがの山越

山花未遍

おほかたの花はまだしき嶺の月のはれゆく空にのこるしら雲

朝見花

明けわたる山路の花のほしもあへず朝露ながら春かぜぞふく

遠村花

櫻さく野邊のはるかぜかをるなりいざ見にゆかむをちの里人

故郷花

さきのこる吉野の宮の花をみて春はむかしとたれうらむらむ

夫木抄題「遠樹花」第三句「ふかぬまに」第五句「をの里人」に作る、

田家花

庵むすぶ春の山田も時しあればなはしろみづに花をまかせて

古寺花

はつせやま山たちはなれちる花をゆくへ定めずさそふ風かな

花似雪

ふるさとはよしのゝ風やかよふらむ櫻の雪もふらぬ日はなし

河邊花

よしの川ゐぜきに花をせきとめて水のこゝろも春をみせける

深山雪

あたら夜の吉野の奥にひとりたれ月と花とのあはれしるらむ

暮山花

みよしのやなげの櫻をたのみにてしをりもしらぬ山の夕ぐれ

古溪花

咲きてちる思なしともいかゞせむ谷にも花のよそならばこそ

關路花

夫木抄第二句「風もたまらぬ」に作る、

ふはの山風もとまらぬ關の屋をもるとはなしにさける花かな

鞨中花

たびごろもきさらぎやよひ日數へて花に馴れたる袖の上かな

湖上花

春かぜのにほてるおきをふくからに櫻をよする志賀のうら浪

橋下花

岩はしの神をたのむのかりなれや櫻をわけてよると鳴くなり

花下送日

夫木抄第一句「花かげの」に作る、

花のかげのたびねのあらし夜ごろへて月ぞなれゆく袖の手枕

庭上落花

かりにだに人こそとはね故郷のさくらはゆきと庭にしけども

暮春惜花

いたづらに春くれにけり花の色の移るを惜しむ眺めせしまに

初秋月

秋のきて露まだなれぬ荻の葉にやがてもなるゝ夕づくよかな

月前草花

つきかげを我身ひとつとながむれば千々にくだくる萩の上露

雨後月

夜半になく鴈のなみだに雨すぎて月にうつろふ野べの色かな

松間月

ほの〳〵と心づくしにもる月をなほ吹きしをる庭のまつかぜ

山家月

やまかげや秋ははらはぬ庭のおもの桐の落葉にすめる夜の月

月前竹風

古里の月吹くかぜになよ竹のなよりあひてもいくよ經ぬらむ

野徑月

わするなよ月にいく野の道すがらそでになれたる女郎花かな

澤邊月

くもりなき澤邊の蘆のうもれみづやどしもなれぬ月の影かな

月前聞鴈

おのがくる嶺のゆふぎりはれはてゝ月にかずしる初鴈のこゑ

浦邊月

あけぬべきよを鹽竈の恨みわびからくも月のたけにけるかな

月照瀧水

ぬきみだる瀧の白絲くりはへてよるともみせぬ月のかげかな

杜間月

月のこる生田の森に秋ふけて夜さむのころも夜半にうつなり

月前秋風

たがためとわきてはふかぬ秋かぜも月みる袖の露をとひくろ

江上月

みしま江のいりえの蘆のしたみだれ亂れても猶月はすみけり

月前蟲

秋ふけぬなけや霜夜のきりぎ〳〵すやゝ影さびしよもぎふの月

月前聞鹿

寢覺のみすゞのしのやに聞ゆなり月につまとふ小男鹿のこゑ

旅泊月

舟とむるむしあげの秋の初風にわすれがたくもすめる月かな

月前草露

夕つゆにやどして月をみやぎ野の小萩が風よこゝろしてふけ

菊籬月

白菊もうつろはむとのわざなれや霜のまがきのありあけの月

新古今集第四句「やゝかげ寒し」に作る、

暮秋曉月

秋もいなば戀しかるべきこよひかなたのめかおきし有明の月

寄雲戀

わが戀は嵐にまよふそらの雲うきてぞこともなき世なりける

寄風戀

わが袖に露はもとよりおきけるをあらはすあきの風の音かな

寄雨戀

こぬ人を月に待ちてもなぐさみきいぶせき宵の雨そゝぎかな

寄草戀

袖におく露のゆくへをたづぬればあはでくる夜の道のさゝ原

寄木戀

後鳥羽天皇

續古今集第四句「あはでこし夜の」に作る、

人心秋の木の葉とうつろへばかはらぬまつのかぜのおとかな

寄鳥戀

しばしこそあけぬるかとも恨みしかまたばぞ今は鳴の羽がき

寄嵐戀

忘れてはねぬべきものを何と又誰まつかぜのあらくふくらむ

寄船戀

わだのはら跡なき波のふな人もたよりの風はありとこそきけ

寄琴戀

かずかずに思ひし事はねにたてじ通ふ松風はいかに吹くとも

寄衣戀

から衣きしもせぬ夜のながめこそさても忘れぬ妻となりけれ

同十二月影供歌合　隱名

寒夜冬月

ふかき夜の霜をちさとに眺むれば月にのこれるむさしの〻秋

山家暮嵐

庭の松にあらし吹きこぬ夕だに深山のおくはさぞなわびしき

初戀

大方の露なきころの袖のうへにあやしく月のぬる〻がほなる

同十二月廿八日石清水社歌合

社頭松

八幡山あとたれそめし注連の内になほ萬代とまつかぜぞ吹く

月前雪

山かぜの木のまの雪を吹くからにこゝろづくしの冬の夜の月

旅宿嵐

くさまくらむすばぬ夢に夜ごろへてたゞ山かぜの松にふく聲

建仁二年正月十三日御會　和歌所

初春松

よろづよのはじめの春としらせけり今朝初風の松にふくなり

春山月

かすみたつ木のめも春のやまのはを光のどかにいづる夜の月

野邊露

梅が香は霞の袖につゝめどもかやはかくるゝ野べのゆふかぜ

同二月十日影供御歌合

海邊霞

うすけぶりもとよりかすむ鹽竈のうらなれにける春の空かな

關路雪

鶯のなけどもいまだ降るゆきに杉の葉しろきあふさかのやま

新古今集詞書「和歌所にて關路鶯といふ事を」に作る、

忍戀

涙にぬるゝいせをの蜑のすて衣忍ばぬだにもしをれわぶなり

同三月廿二日三體和歌　高體（春夏）痩體（秋冬）艶體（戀旅）

春

鴈かへるはつせの花のいかなれや月はいづくもおなじ春の夜

夏

なつの夜の夢路すゞしき秋のかぜさむる枕にかをるたちばな

秋

しをれこし袂ほすまも長月のありあけの月にあきかぜぞ吹く

冬

思ひつゝあけ行く夜半の冬の月やどるかせばき袖のこほりに

戀

いかにせむ猶こりずまのうら風にくゆる煙のむすぼゝれつゝ

新千載集第五句「むすぼゝれゆく」に作る、

旅

たびごろもきつゝなれゆく月やあらぬ春は都と霞むよのそら

同三月同日當座御會

暮春

ことしさへ志賀のやょひの花ざかりとはれてくれぬ春の故郷

同五月影供御歌合

曉聞時鳥

今こむとたのめやおきし時鳥月ぞ立ち出づるありあけのこゑ

松風暮涼

夏山のしかに告げこせまつのかぜをのへに今は秋のゆふぐれ

遇不逢戀

忘らるゝ身をしる袖のむらさめにつれなく山の月は出でけり

新古今集詞書「百首の歌の中に」に作る、

同六月水無瀬釣殿御歌合

河上夏月

筏士のうきね秋なるなつの月きよたきがはにかげながるなり

海邊見螢

津の國のあしやの里にとぶ螢たがすむかたのあまのいさり火

山家松風

柴の戸をあさあけの夏の衣手にあきをともなふ松のひとこゑ

初戀

おほかたの夕は里のながめよりいろづきそむる袖のひとしほ

忍戀

嘆きあまり物や思ふとわがとへばまづ知る袖のぬれて答ふる

久戀

おもひつゝへにける年のかひやなきたゞあらましの夕暮の空

同八月十五夜

月前蟲

故郷のよもぎが月にむすぶ露さびしとかこつきり〴〵すかな

月前鹿

いつとても月に袂はぬれこしをわきてこよひの小男鹿のこゑ

月前風

なかはたけは今夜の月を吹きかへせさぞなむかしの秋の山風

同八月廿日影供歌合

江月聞鴈

秋を經て月ぞすみの江のまつかぜに鴈がねさむし霜になる空

夜風似雨

まつかぜはみやまの月に廻るなりねざめの秋の袖にしぐれて

依忍增戀

せきあへず涙の川にうきねしてみる夜の夢の定かにもあらぬ

同九月十三夜御會當座

月前秋風

夜半の月いづる外山のみねにおふる松をもはらへ秋ふかき風

水路秋月

にほの海やひとりぞ出づる秋の夜の月を友とは志賀のふな人

曉月鹿聲

さをしかのなく音にあらぬ露ぞおく空ゆく月は嶺ちかきほど

同夜當座御會

折句十三夜

志賀のうらやうらわの月のさゆる夜に昔こふらし山の秋かぜ

隱題水無瀨河

なみをみなせかばぞ月のしばしすむ清瀧川のはやきながれは

同九月廿九日戀十五首撰歌合（十三夜イ）

春戀

月殘る彌生の山の霞む夜を夜よしとつげよまたずしもあらず

夏戀

さてもいかにいはがきぬまの菖蒲草あやめもしらぬ袖の玉水

秋戀

よしやさはたのめぬ宿の庭におふるまつとなつげそ秋の初風（タイ）

冬戀

うつりゆく籬の菊もをり〳〵は馴れこしころの秋をこふらし（トイ）

曉戀

白露のおきて侘しきわかれをもあふにぞかこつありあけの月

暮戀

いかにせむこぬ夜あまたの袖のつゆ(露)月をのみ待つ夕ぐれの空

羇中戀

君ももし詠めやすらむたびごろもあさたつ月を空にまがへて

山家戀

身をしれば思ひもよらで杉の庵になほさりともと松風ぞふく

旅泊戀

おもふ人をうきねの夢にみなせ(ヒイ)川さむる袂にのこるおもかげ

關路戀

新續古今集第三句「袖の露に」に作る、

戀をのみすまの關やのいたびさしさして袖とも波はわかじを

故里戀

さとはあれぬ尾上の宮のおのづからまちこし宵も昔なりけり

海邊戀

いかにせむおもひありその忘貝かひもなぎさに波よするそで

河邊戀

我爲とさてや山川瀨になびく玉藻かりそめにかわく世(ま)もなし(くイ)

寄雨戀

おもふ事そなたの雲(空イ)となけれどもいこまの山の雨のゆふぐれ

寄風戀

わくらはにとひこし比におもなれてさぞ(もイ)あらましの庭の松風

一本「我秋さて山河の瀨になびく玉藻かりそめにかわくまぞなき」に作る、

一本第三句「思ひなれて」に作る、

同三年正月十五日御會　高陽院殿

松有春色

庭の松おのがみどりもたよりあれば今か幾世の春をむかへむ

同六月十六日影供歌合

草野秋近

のべの庵の軒端の荻にむすびおく露をかごとに夏更けにけり

水路夏月

いかだしよいく夜か袖にみなれざをきよたき川の夏の月

雨後聞蟬

蟬の羽にもとおく露に雨過ぎてぬるゝがほなる夕ぐれのこゑ

同日影供之次夏月二首

一本「七月十五日」に作る、

秋の月かげをや夏にかさゝぎの雲のかけはしほどはなけれど程もなく出でゝいなばの峯におふるまつとしつれば有明の月

同七月五日八幡（若イ）宮撰歌合

初秋風

わぎも子が袖吹きかへす秋かぜのまだうらなれぬ涙とふらむ

野徑月

さびしさは秋のさが野の野べの露月に跡（事）とふ千代のふるみち（ほそイ）

故郷霧　海邊鴈　羇中春　（已上三首御製不被入歟）

山家松

都人とはぬほどをもおもひしれみしよりのちの庭のまつかぜ

同八月十五夜和歌所當座五首

月　あきのつき此五字渉五首置初一字

あふみのやながらの山の秋かぜに雲こそなけれからさきの月

北へさりし鴈もこよひの月ゆゑや秋はみやこと契りおきけむ

のどかならむまでとや人の契りけむあれたる庭の秋の夜の月

津の國のなにはわたりは月のあき忘れねいまは春のあけぼの

きてとはむ人のあはれとおもふまですめかし秋の山里のつき

同十一月釋阿九十賀御會

もゝとせに近づく杖のよゝの跡にこえてもみゆる老の坂かな

同時屏風御歌

霞

かすみしく春の夕ぐれながむれば山さしのぼるおぼろなる月

新古今集詞書「釋阿和歌所にて九十賀し侍りしをり屏風に櫻さきたる所を」に作る、

若草

下もゆる春日の野邊の草の上につれなしとても雪のむらぎえ

花

櫻さくとほ山鳥のしだり尾のながゝし日もあかぬいろかな

郭公

ほのかにもいまや聞くらむ郭公いやとほざかる末のさとびと

五月雨

水まさるみつのわたりの五月雨につなで程ふるのぼり舟かな

納涼

清水せくかたやまぎしの小松かげこゝをしめてや庵むすばむ

秋野

後鳥羽天皇

たびねするのはら秋かぜ身にしめて面影さらぬふるさとの月

月

秋のしも白きをみればかさゝぎのわたせる橋に月のさえける

紅葉

山の蟬なきて秋こそふけにけれ木々のこずゑの色まさりゆく

千鳥

たびねするあまの苫屋のとまをあらみ寒き嵐に千鳥さへなく

雪

山ふかきしのやの雪のあさければ都はなほやみぞれふるらむ

氷

大井川こほりをしのぐいかだしの跡よりこそは舟のかよひぢ

同月日六首　和歌所

故郷春曙

みよしのや花はかはらず雪とのみふるさと匂ふあけぼのゝ空

鬻中夏螢

玉藻しき一夜ふしみむあしのやのなだのしほぢに螢とぶなり

野徑秋風

いにしへの千代の古道としへても猶あとありやさがの山かぜ

山家冬雪

いつまでか跡をも雪にをしみこし春にまかするしばの庵かな

海邊月明

清見がた富士の煙やきえぬらむ月かげみがくみほのうらなみ

寄暮雜歌

ながめのみしづのをだまき繰りかへし昔をいまの夕ぐれの山

元久元年七月十六日御會　宇治御幸

うぢの山雲ふきはらふ秋かぜにみやこのたつみ月もすみけり

水月

むかしよりたえぬ流にすむ月をみがきてわたるうぢの川かぜ

野露

みやぎ野の草葉に露やおもるらむ木の下はらふ秋のはつかぜ

夜戀

足引の山風吹きてさむき夜のながきをひとり戀ひつゝぞふる

秋旅

みやこいでしまだ夏衣うすきほどしばし吹きそふ富士の秋風

同八月十五夜御會　五辻殿初度

松間月

月のすむひらの〻松に吹く風のちかきを宿のかひにするかな

野邊月

むさしのや明けゆく月の山の端はわけこしかたの荻のうは風

田家月

鹿の鳴く小田のかり庵の苫を荒み名ばかり月はもり明せども

羇旅月

都おもふ涙に月をやどしおきてあさたつのべのすゑの秋かぜ

名所月

月は今夜浦は明石としらずともしるくもあるべき浪の上かな

同夜當座御會

翫月

あすよりは秋のなかばも杉の門しばしなあけそ三輪の月かげ

同十月石清水御歌合當座

初冬

秋の露わすれぬ袖もあるものをいつしかかはる野邊の霜かな

時雨

まきのやにいとはじ時雨もるとても漏ればぞやどる床の月影

寒野

一とせも今はすゑのゝむらすゝき霜ふく夜半の風のさむけさ

同十月日當座歌合　北野社歌合之由被注尤不審

時雨

月ぞ今はもるやま道の夕しぐれのこる下葉もあらし吹くなり

一本第一句「月ぞ今」に作る、

忍戀

わがこひはまきの下葉にもる時雨ぬるとも袖の色にいでめや

一本「北野宮歌合元久元年十一月十一日當座」に作る、

羇旅

淋しさをいつよりなれてながむらむまだみぬ山の秋の夕ぐれ

同十一月十三日春日社御歌合

落葉

木の葉ちる山の裾野の夕ぐれをながめてけりな袖はぬれつゝ

曉月

あしびきの山の木がらし吹くからにくもるときなき有明の月

松風

あはれまむ數には入れよ春日山それをぞ今はまつにふくかぜ

同十二月八幡三十首御會

春

八幡山みねのかすみのうちなびき春にもなりぬあけぼのゝ空

霞たち木のめ春風ふくからに消えあへぬゆきに花ぞうつろふ

うちなびき春やたつらむ吉野山やまもかすめるかぜの音かな

難波がたあし火たくやの春のそらくゆる煙にたつかすみかな

春ふかみ花に山かぜふくまゝに吉野のまつにかゝるしらくも

とはれてや春もくれなむ御芳野のはなちる庭のありあけの月

夏

春くれて一夜ふしみのあけぼのにをはつせ山の夏をみるかな

わが宿の軒のこずゑに夏はきてもりえぬ月のかげぞさびしき

郭公こゑのよすがとなるものはなきつる雲のむらさめのそら

むらさめのつゆの名殘をならの葉に殘してみがく夏の夜の月

夕だちのまだはれやらぬ山の端におのれさやけくとぶ螢かな

かぜの音も立田のもりになく蟬の羽におく露も秋を待つらし

秋

秋はぎの上葉つれなくおく露にやどれる月のかげぞうつろふ

さをしかの涙はみえぬゆふまぐれほしえぬ袖の露をからなむ

苫をあらみつゆは袂におきゐつゝかりほの庵の月をみしかな

たれみよと露のそむらむたかまどの尾上の宮の秋はぎのはな
露のおくとてこそぬるゝ袖の上をあやしと月を影やどすらむ
かねの音にけふもくれぬとながむればあらぬ露ちる袖の秋風

冬

神無月もみぢになりぬたつた山三室のしぐれ日かずふるらし
冬はまだあさぢがうへにふる霜の雪かとまがふあけがたの空
木の葉しく山下水のうすごほりひとへに秋をむすぶなりけり
綱代木にいざよふなみやこほるらむ千鳥吹きよるうぢの川風
冬さむみよし野の雪のさえ〳〵てくもるも知らぬ山の端の月
とほざかる波も音せずさよふけてこほりをわたる志賀の山風

雜

からごろも袖しくうらのかぢまくら枕の波にちどりをぞ聞く
たびの月清見がうらにやどからむなみの關守うちもねなゝむ
都だにさぞなさびしき松のかぜひとりみ山にたれしのぶらむ
すぎ來つる旅のあはれをかず〴〵にいかで都の人にかたらむ
草枕もとよりつゆはおくものをあらぬすぢにや月もすむらむ
いはしみづきよき心をみねの月てらさばうれしわかのうら風

同月賀茂上社三十首御會

春

賀茂山のふもとのしばの春かぜに御手洗河のこほりとくらし
二見がた春のしほやの夜半の月けむりいとへばかすむ空かな
たてながら三世の佛にたてまつる花かもをるな春のやまびと

里はあれぬ志賀の櫻の木のもとにむかしがたりの春風ぞふく
いそのかみふるの山べの山おろしいくへの春の花さそひきぬ
花ちりぬいし井の水のしひてなほ春をとゞめよ志賀の山かぜ

夏

ほとゝぎすおのが五月を松の風ふくかときけばむらさめの聲
時鳥まつ夜ながらのうたゝねに夢ともわかぬあけがたのこゑ
ながむれば槇の木のまに月さえてみ山はまだき秋かぜぞ吹く
夏ふかみ月まつ夜半の山の端にひかりをならす庭のいなづま
夏ふかみ木だかき松の夕すゞみこずゑにこもるあきの一こゑ
夏と秋と行きかふ夜半の涙の音のかたへすゞしき賀茂の河風

秋

心すむためしなりけりちはやぶる加茂の河原のあきの夕ぐれ
羽にかくるとこ夜の雲やくるかりの都の月のくまとなるらむ
野原より露のゆかりをたづね來てわが衣手にあきかぜぞふく
すゞむしのこゑ故郷のあさぢふによすがらやどる秋の月かな
あきかぜも身にさむしとや蟋くるゝ夜ごとにこゑうらむらむ
今こむとたのめし庭に露さむしありあけがたのながつきの月

冬

吹きまよふ木の葉にいろや殘るらむ昨日くれにし杜の秋かぜ
もみぢばも今はあらしの日數へてみ山あらはに冬は來にけり
をりくぶる柴のけむりの絶えゝに麓の風にむすぼゝれゆく
庭の雪も蹈分け難くなりぬなりさらでも人を待つとなけれど

笹の葉はみ山もさやに置く霜のこほれるにさへ月はすみけり

都人とはでつきひはすぎの葉に雪のみふかきをのゝやまもと

雑

賀茂山や山吹く風はのどかにて神のちかひもたのもしのよや

都にはたゞくもらずと月はみるすまじや槇の木の間もるかげ

山里はみねのあらしにねざめして思へば袖にしのゝめのつゆ

うみ山もたびの枕のねざめにはまつかぜよりぞ袖はぬれける

山寺のけふもくれぬの鐘の音になみだうちそふ袖のかたしき

みたらしや神の誓を聞く折ぞなほたのみあるこの世なりける

賀茂下社三十首御會

春

柳ふくはつ春風にさそはれて千代をこめたるうぐひすのこゑ

春のきておろすあらしはさゆれども霞ぞいそぐあまのかぐ山

芳野山春たつみねのかすみよりことしは花とふれるしらゆき

ふるさとの春やむかしの軒端より月にかをれる梅のはつはな

春のきてあけゆく山のむらがすみおぼろにのこるよこ雲の月

みかりせしすそのゝ雪におもなれて春の櫻にきゞす鳴くなり

夏

けふよりや山を霞の立ちはなれいなばのみねの夏のあけぼの

やまのはの月は朧の夏の雨にひとりさやけきほとゝぎすかな

有明の月のゆくへをながむらし山の端かこつほとゝぎすかな

羽衣のうすきにすらむ夏の夜はつきかげよりぞ秋はおぼゆる

一こゑの名殘はさても有明のつれなくみゆるほとゝぎすかな

わぎも子がやどのさゆりの露さむみかぜよりさきの秋の夕暮

秋

月影もまだ來むころをたのむなりいなばの山の秋のはつかぜ

大方の秋とはしらでながむともしるくもあるべき袖の露かな

あまのがは雲のしがらみ浪こえて露ところせき秋のそでかな

里がらの秋とはことにながむとも宮もわらやも同じゆふぐれ

いとゞしく袖ほしがたき故郷に露おきそふるあきのむらさめ

たが寢覺とふともわかぬかぜの音も秋はならひの床のしら露

冬

山がつの冬くるからにたきすさぶしばゞくもる初時雨かな

しらつゆも時雨もいたく故郷は軒のこずゑもこさまさりけり

立田山ふゆのあらしは雲なれや木の葉の雨のさみだれのころ

きのふかもいなばもそよの秋のかぜみ山の松の雪をふくなり

さむしろに衣かたしき月をのみまつの木の間ぞ冬もかはらぬ

うきねもる鴨のつばさにおける霜かさぬるからにさゆる毛衣

雜

明石がた波まの月を吹きしをれうらこぐふねのあとの潮かぜ

から衣きつゝ馴れにしあとふりてけふぞ三河の沼のやつはし

村雨のおとになれたるすまひかな月すむよはも庭のまつかぜ

山里はみはてぬ夢も暫しこそ住みなれぬればすみうからぬを

世の中はあるにまかせてふるさとの袖もまがきもおなじ白露

あしのやのなだの鹽くむ蜑の袖ぬるればとてや月もすむらむ

同月住吉三十首御會

春

いくとせの初春風になれぬらむみてだに久しすみよしのまつ

さしむすぶ春の池水隙もりてこほりのうへにさゞなみぞたつ

爪木こる谷の北かぜ吹きかへてけふよりはるとと人にしらるゝ

あはぢしま浪におちぬるあかつきのくもらであくる有明の月

八重がすみけぶりもみえずなりぬなりふじの高嶺の夕暮の空

わが身世にふるの山邊の山櫻うつりにけりなながめせしまに

夏

さゆり葉の葛城山のみねの月あかつきかけてかげぞすゞしき

夏の夜はをじかの角のつかのまにやすらふ月のあくる山の端

すがはらやふしみのやまの郭公木の間の月にきつゝなくなり

雨そゝぐかた山をのゝ早苗どき引くしめ繩にかはづなくなり

夏ふかき鳥羽田のいなば露落ちてまだほにいでぬ風渡るなり

ほの〳〵とうきたる船のいかならむ夕たつ波のあらき浦かな

秋

露しげき袖をたづねて秋の來ばよそにはきかじ荻のうはかぜ

たが秋の物おもふ宿に吹きなれてわが袖かこつ荻のうはかぜ

松かぜに夢のうきはしとだえしてたびねよぶかき秋の夜の月

難波がたしほせの波を吹くかぜにあしの葉そよぐ秋の夕ぐれ

ながめ行く心の色のはつもみぢいづれの山のしぐれそむらむ

みねの雲まきのを山にふくあらしふけぬやどかせうぢの里人

冬

秋はつる恨よ今朝はきり〳〵すたのむよもぎふ霜きえぬなり

山人のとやまの袖やしぐるらむたかねがくれに雲のかゝれる

みよしのゝさとのねざめの床さえてけさまづしろし雪の下風

さびしさに煙をたにのけぶりゆく外山のしばに風すさむなり

今朝きたるをのゝ里人こと問はむみやこの方の雪はあさしや

たつた山しぐれはそむるあとにまた紅葉ふきかへす木枯の風

雜

あらし吹くしのやの月に思ふかな都もかくや夜さむなるらむ

月故になれしを忍ぶ人やあるとやすらひかねてあくる山の端

いつのまにむかひの岡の小松原月もるまでになりにけるかな

何事を思ふ人ぞと人のとはゞなしとやいはむいかゞこたへむ

山深みとはぬならひをうち忘れ雲のはたてにながめわびつゝ

我かくて世に住吉のうらかぜをたのむこゝろは神のまに〳〵

同二年三月日吉三十首御會

春

春來ぬと聞きつる山のかひなれやかすみてすぐる嶺の松かぜ

ほの〴〵と春こそ空に來にけらし天のかぐ山かすみたなびく

春はなほあさづま山をいづる日に波立ちそむる志賀のから崎

よしの山春ぞしらくも霞みつゝ花咲きげなるみねのいろかな

あかつきのこれもならひの別ぞとつれなくみえて歸る鴈がね

おしなべて花と雲とをさそひけりながらの山のみねの春かぜ

夏

片岡の森の木蔭に立ちぬれてまつともしらぬほとゝぎすかな

玉がしはたま〳〵はるゝ五月雨の雲まの月の影をしぞおもふ

ほの〴〵とありあけの月をまち出でゝ山郭公ひとりなくなり

すがはらやふしみのさとに來鳴くなりわが世やへつる山郭公

夏の日のもりくるからに涼しきは山田のはらの杉のしたかげ

六月の一むらすぐるよひの雨におぼえて月のたけにけるかな

秋

しがの浦に釣するふねの蜑の袖今朝吹きかへすうらの秋かぜ

おほかたのならひか里のそでの露なほふか草のあきの夕ぐれ

夫木抄第二句「山田の庵の」に作る、

物おもふたれになれたるあきかぜのたゞ大方の袖にふくらむ

忘れなむなか〳〵荻のうはかぜと思ひすつれど秋のゆふぐれ

足曳の山田もる庵のとまをあらみ木のした露や袖にもるらむ

ながむれば涙しぐれとふるさとにおもひもいれじ秋の夜の月

冬

冬にいまはなるみの浦のうつせ貝うつればかはる涙の音かな

ふか緑あらそひかねていかならむまなくしぐれのふるの神杉

冬の夜の長きをおくる袖ぬれぬあかつき方の四方のあらしに

ながむればかり田の雪にゐる鴈の友呼ぶ聲のさむきあけぼの

冬ふかき草のはらなる霜の上にいとゞさび行くかぜの音かな

冬きてもそらだのめなる緑かないづら常磐のもりのこがらし

雑

神のちかひはらぬいろを頼むかなおなじみどりの唐崎の松

よをいとふ吉野のおくの柴のいほにあかずも咲ける山櫻かな

すまの關かよふ千鳥もうちわびぬいたくなふけそ有明のつき

さらぬだにみやこ戀しき東路にながむる月のにしへゆくらむ

いにしへの人の心にゐしせきはいづれの世より跡絶えにけむ

みずしらぬむかしの人の戀しきは此世を歎くあまりなりけり

新拾遺集詞書「旅の御歌の中に」第五句「にしへゆくかな」に作る、續千載集詞書「人々に五十首の歌めしけるついでに」に作る、

同三月廿六日

新古今竟宴和歌

いそのかみふる世を今にならべこし昔のあとを又たづねぬる

同七月十八日北野御歌合　祈雨當日出題攝政判有序

續古今集第二句「ふるきをいまに」第五句「又たづねつゝ」に作る、

初秋曉

秋になるあかつきの鐘うちつけになるゝか袖の露もしぐれも

暮山雨

あしびきの山邊もよそに曇り來ぬ秋のめぐみのゆふぐれの雨

田家風

空にこふかどだの雨の日數經て雲吹きかへすあきのゆふかぜ

建永元年正月十一日御會　高陽院

庭花春久

春とめる庭のあるじは八雲たついつもつきせぬ花の香ぞする

同七月廿五日御歌合　卿相侍從歌合

朝草花

新千載集詞書「和歌所の歌合に海邊月を」夫木抄第五句「有明の月」に作る、

横雲のたなびく山の岡邊なるすゝきもしろく吹くあらしかな

海邊月

もろこしの山人いまはをしむらむまつらが沖のあけがたの月

羇中暮

おくるべき月だにやまをまだ出ぬに夕のあらし袖にしをれぬ

同日當座御歌合

曉聞鴈

はつかりの山とびこゆるありあけに風吹きすさむ荻の上かな

田家鹿

夜もすがら庵もる聲のとだえせで外山にかへる鹿ぞ鳴くなる

深山戀

跡たえてふかきなみだの色までもとはれぬ山の秋ぞかなしき

同月中後日當座御歌合

湖邊月

にほの海のもとよりぬるゝ袂かなかはりてやどれ秋の夜の月

暮山雲

白雲のたなびく山のゆふかぜに身をやすてゝむ鹿ぞ鳴くなる

行路風

しのびこし道のべ柳秋もなほあはれむかしのかぜはらふらむ

同月中當座御歌合

寄風懷舊

わすれぬる今は三年の冬のあらししぐれし露の袖にまだひぬ

雨中無常

なき人のかたみの雲やのぼるらむゆふべの雨に色はみえねど

被忘戀

袖の露もあらぬ色にぞ消えかへるうつればかはる嘆せしまに

新古今集第三句「しぐるらむ」に作る、

同八月五日鳥羽院新御所初度　本度歟

庭上月　當座

庭の松にふるき嵐やかへるらむひかりをみがく宿のつきかげ

同八月御歌合式御會

述懷三首

なにと又ふかき思のかさぬらむくだるよをのみ嘆くべき身に

なさけありし昔を今になしわびて袖のしづくの賤のをだまき

うしとみしそれより袖はしをれにき扨も月日は過しけるよを

承元元年正月廿二日御會　和歌所

春松契齢　宸筆御清書神路山有闕字

わがたのむ神路のやまの松のかぜいくよの春も色はかはらじ

同三月七日鴨御社歌合

山家朝霞

槇の戸やつれなくあけしなごりとてこれよりつらき朝霞かな

湖邊夕花

けふくれぬあすは麓の雪とみむながらの山はあらし吹くなり

社頭述懷

瑞垣やわが世のはじめ契りおきしその言の葉を神やうけゝむ

同日賀茂(別雷)社歌合

海邊歸鴈

難波がたすぎこし春に又や逢ふはかなくかへる鴈ぞ鳴くなる

一本第三句「又やあふと」に作る、

暮山春雨

みよしのや春雨きほひちる花をけふもくれぬとさそふ山かぜ

社頭夜風

和歌の浦たむくる夜半のかぜにみむなほ此道に神はなびくや

同二年二月内宮三十首御會

春

はるかぜのなびくにつけて吉野山みねの小松ぞ色まさり行く

しづが庵の中がきかこふ梅がえのゆく手の袖に匂ふはるかぜ

みよし野の霞つれなきやまのはをわけてもいづる春の夜の月

歸る鴈いやとほざかり雲がくれなきてぞこゆるあけぼのゝ山

歸るかりとこよの雲におもひいでよ吉野の花のあけぼのゝ空

ひらの山みねの櫻はちりぬらむ花にこぎ行く志賀のうらぶね

夏

うたゝねの夢や昔にのこるらむ花たちばなのあけぼのゝそら

郭公よはのたびねのあけぼのに山とぶこゑのくもに落ちくる

うき世をやしのぶの山の時鳥おもひかねつゝこゑきこゆらむ

時鳥くもゐのよそに過ぎぬなりはれぬおもひの五月雨のころ

きえね唯もゆるほたるの下の思さりとて人もかけじあはれを

まつしげきむかひの岡の夕すゞみ秋よりさきに風ぞなれゆく

秋

夕露のおくか荻はらこゝろしてふきなかへしそ秋のはつかぜ

わすれにしよゝのおもひの袖の露に色ふきそふる秋風ぞうき

あしびきのやまの道芝ふみわけてまだ聞きなれぬ嵐をぞ聞く

おぼえずよいづれのあきの夕より露おくものと袖のなりけむ

みよしのゝ岩のかげぢをならしても猶うきものは秋の夕ぐれ

宿とはむ方もいづくとしら雲のたなびきわたる山のかけはし

續古今集第四句「猶うき時か」に作る、

冬

しぐれつゝみ山色づく山おろしに涙あらそひちる木の葉かな

山里は夜まさにながき窓の前ふかき木の葉を吹くあらしかな

あやしくも夜のまの風のさえ〳〵て今朝雪しろし庭の淺茅生

冬くれば身にしむ風に夢さめてひとりぬる夜は床やさびしき

かさゝぎのはねに霜おきさむき夜の有明の月は影ぞこほれる

みねの雪みぎはのこほりあともなしとはれぬ冬のうちの川風

雜

ながめばや神路の山に雲消えてゆふべのそらをいでむ月かげ

けふまでは心のうちに嘆く世をいかでしる夜の月ぞあやしき

よそにては恨むまじともみえしよを袖しをれつゝ嘆きこし哉

世の中をまことにいとふ人やあるとこの夕暮の雲にとはゞや

大空にちぎるおもひのとしも經ぬ月日もうけよゆくすゑの空

神路山あふぐこゝろのふかきをもいはで思へば色にみゆらむ

新古今集詞書「大神宮の歌合に」に作る、

同外宮三十首御會

後鳥羽天皇

春

白妙の袖にぞまがふみやこびとわかなつむ野のはるのあは雪

百千鳥なけども雪はふるさとのよしの丶山のあけぼの丶そら

にほの海やみぎはのこほりこぎわけて霞にまがふ春の舟びと

大空はそこともみえず霞みつ丶ゆくかたしらぬありあけの月

ながめやるとほ山松の木のまより霞にみえてかへるかりがね

吉野山たかねの雲は晴れぬらむふるさとさえぬ雪つもるころ

夏

いにしへをこふる夕の軒端なるたちばなすぐる風ぞかなしき

山ざとはみねのあま雲とだえして夕すゞしきまきのしたつゆ

五月闇はれせぬみねのあま雲になさばや袖のほすまなきころ

續拾遺集詞書「若菜をよませ給ひける」に作る、

新古今集第一句「山里の」に作る、

秋ちかくみだるゝ澤のほたるかもいなづますぐる露の草むら

みなづきや一むらすぐるゆふだちにしばしすゞしき森の下露

露はらひ夏野にそよぐ小男鹿のなかぬばかりのゆふぐれの空

秋

秋の露いかにおきけるなごりとて今朝いろふかし庭のむら萩

朝露のをかのかやはら山かぜにみだれてものは秋ぞかなしき

かぜ吹けば玉とみえつゝ朝露の荻のうは葉ぞしづごゝろなき

末たわむ庭の小はぎの朝じめり物おもふ鴈や鳴きて過ぎつる

たれ今宵ひなのながぢをこぎはなれ大和島根の月をみるらむ

袖にふく夕の風のふかきいろをわすれてすぎむみ山路のあき

續千載集詞書「大神宮に奉らせ給ひける五十首の歌の中に」に作る、

冬

後鳥羽天皇

いこま山雲のいにしへしらねどもはれぬ時雨に思ひわびつゝ
網代もるうぢの里人うしと世をしらずながらや袖ぬらすらむ
山里のかりたの末のあさぼらけ霜うちはらひたづぞ鳴くなる
冬の夜のこほれる雪をふく風に月さへさむくなりまさるなり
かざしをる袖もや今朝は氷るらむ三輪の檜原の雪のあけぼの
花をまつ吉野の松の雪のいろにかねてぞ春のおもかげはたつ

雑

かくれなくてらせばうれし神風やあふぐ心のふかきおくをも
故郷になれし夕をおもひ出でゝ山ふきおくるあきのまつかぜ
波にしく袖に跡ふめはまちどり明けなば月のかげもとまらじ
ながむればそこはかとなく袖ぬれぬむなしき空の四方の嵐に

萬代集第二句「門田の末の」に作る、

山里のよるのあらしに夢さめておもふこゝろを人はしらなむ
神風やとよみてぐらになびくしでかけてあふぐといふも畏し

同三月住吉御歌合

寄月祝

ゆくすゑはなほもつもりの浦風にくもらぬ月の影の長閑けさ

寄旅戀

あしびきの山わけごろもかわく程すまれぬそでの夜半の面影

寄山雑

おく山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

同閏四月四日

雨中子規

新古今集詞書「住吉の歌合に山を」に作る、